

医薬品インタビューフォーム

日本病院薬剤師会 IF 記載要領 2018（2019 年更新版）に準拠して作成

HMG-CoA 還元酵素阻害剤**処方箋医薬品****日本薬局方ロスバスタチンカルシウム錠****ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」****ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」****ROSUVASTATIN TABLETS 「KMP」****ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KMP」****ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」****ROSUVASTATIN OD TABLETS 「KMP」****（ロスバスタチンカルシウム口腔内崩壊錠）**

剤形	ロスバスタチン錠「KMP」：フィルムコーティング錠 ロスバスタチン OD 錠「KMP」：素錠（口腔内崩壊錠）
製剤の規制区分	処方箋医薬品（注意－医師等の処方箋により使用すること）
規格・含量	錠 2.5mg、OD 錠 2.5mg：1 錠中ロスバスタチン 2.5mg （日局ロスバスタチンカルシウムとして 2.6mg）含有 錠 5mg、OD 錠 5mg：1 錠中ロスバスタチン 5mg （日局ロスバスタチンカルシウムとして 5.2mg）含有
一般名	和名：ロスバスタチンカルシウム（JAN） 洋名：Rosuvastatin Calcium（JAN、INN）
製造販売承認年月日 薬価基準収載・販売開始年月日	製造販売承認年月日：2019 年 1 月 22 日（販売名変更による） 薬価基準収載年月日：2023 年 6 月 16 日（販売名変更による） 発売開始年月日：2017 年 12 月 8 日
製造販売（輸入）・ 提携・販売会社名	製造販売元：共創未来ファーマ株式会社
医薬情報担当者の 連絡先	
問い合わせ窓口	共創未来ファーマ株式会社 お客様相談室 TEL 050-3383-3846 受付時間：9 時～17 時（土、日、祝祭日、弊社休日を除く） 医療関係者向けホームページ http://www.kyosomirai-p.co.jp/medical/top.html

本 IF は 2023 年 7 月改訂（第 1 版、効能変更）の電子添文の記載に基づき作成した。
最新の情報は、独立行政法人 医薬品医療機器総合機構の医薬品情報検索ページ
（<https://www.pmda.go.jp/safety/info-services/drugs/0001.html>）で確認してください。

1. 医薬品インタビューフォーム作成の経緯

医療用医薬品の基本的な要約情報として、医療用医薬品添付文書（以下、添付文書）がある。医療現場で医師・薬剤師等の医療従事者が日常業務に必要な医薬品の適正使用情報を活用する際には、添付文書に記載された情報を裏付ける更に詳細な情報が必要な場合があり、製薬企業の医薬情報担当者（以下、MR）等への情報の追加請求や質疑により情報を補完してきている。この際に必要な情報を網羅的に入手するための項目リストとして医薬品インタビューフォーム（以下、I F と略す）が誕生した。

1988 年に日本病院薬剤師会（以下、日病薬）学術第 2 小委員会が I F の位置付け、I F 記載様式、I F 記載要領を策定し、その後 1998 年に日病薬学術第 3 小委員会が、2008 年、2013 年に日病薬医薬情報委員会が I F 記載要領の改訂を行ってきた。

I F 記載要領 2008 以降、I F は P D F 等の電子的データとして提供することが原則となった。これにより、添付文書の主要な改訂があった場合に改訂の根拠データを追加した I F が速やかに提供されることとなった。最新版の I F は、医薬品医療機器総合機構（以下、PMDA）の医療用医薬品情報検索のページ（<http://www.pmda.go.jp/PmdaSearch/iyakuSearch/>）にて公開されている。日病薬では、2009 年より新医薬品の I F の情報を検討する組織として「インタビューフォーム検討会」を設置し、個々の I F が添付文書を補完する適正使用情報として適切に審査・検討している。

2019 年の添付文書記載要領の変更に合わせ、I F 記載要領 2018 が公表され、今般「医療用医薬品の販売情報提供活動に関するガイドライン」に関連する情報整備のため、その更新版を策定した。

2. I F とは

I F は「添付文書等の情報を補完し、医師・薬剤師等の医療従事者にとって日常業務に必要な、医薬品の品質管理のための情報、処方設計のための情報、調剤のための情報、医薬品の適正使用のための情報、薬学的な患者ケアのための情報等が集約された総合的な個別の医薬品解説書として、日病薬が記載要領を策定し、薬剤師等のために当該医薬品の製造販売又は販売に携わる企業に作成及び提供を依頼している学術資料」と位置付けられる。

I F に記載する項目配列は日病薬が策定した I F 記載要領に準拠し、一部の例外を除き承認の範囲内の情報が記載される。ただし、製薬企業の機密等に関わるもの及び利用者自らが評価・判断・提供すべき事項等は I F の記載事項とはならない。言い換えると、製薬企業から提供された I F は、利用者自らが評価・判断・臨床適用するとともに、必要な補完をするものという認識を持つことを前提としている。I F の提供は電子データを基本とし、製薬企業での製本は必須ではない。

3. I F の利用にあたって

電子媒体の I F は、PMDA の医療用医薬品情報検索のページに掲載場所が設定されている。

製薬企業は「医薬品インタビューフォーム作成の手引き」に従って I F を作成・提供するが、I F の原点を踏まえ、医療現場に不足している情報や I F 作成時に記載し難い情報等については製薬企業の MR 等へのインタビューにより利用者自らが内容を充実させ、I F の利用性を高める必要がある。また、随時改訂される使用上の注意等に関する事項に関しては、I F が改訂されるまでの間は、製薬企業が提供する改訂内容を明らかにした文書等、あるいは各種の医薬品情報提供サービス等により薬剤師等自らが整備するとともに、I F の使用にあたっては、最新の添付文書を PMDA の医薬品医療機器情報検索のページで確認する必要がある。

なお、適正使用や安全性の確保の点から記載されている「V.5. 臨床成績」や「XII. 参考資料」、「XIII. 備考」に関する項目等は承認を受けていない情報が含まれることがあり、その取り扱いには十分留意すべきである。

4. 利用に際しての留意点

I Fを日常業務において欠かすことができない医薬品情報源として活用していただきたい。
I Fは日病薬の要請を受けて、当該医薬品の製造販売又は販売に携わる企業が作成・提供する、医薬品適正使用のための学術資料であるとの位置づけだが、記載・表現には薬機法の広告規則や医療用医薬品の販売情報提供活動に関するガイドライン、製薬協コード・オブ・プラクティス等の制約を一定程度受けざるを得ない。販売情報提供活動ガイドラインでは、未承認薬や承認外の用法等に関する情報提供について、製薬企業が医療従事者からの求めに応じて行うことは差し支えないとされており、MR等へのインタビューや自らの文献調査などにより、利用者自らがI Fの内容を充実させるべきものであることを認識しておかなければならない。製薬企業から得られる情報の科学的根拠を確認し、その客観性を見抜き、医療現場における適正使用を確保することは薬剤師の本務であり、I Fを活用して日常業務を更に価値あるものにしていただきたい。

目 次

I. 概要に関する項目	1
1. 開発の経緯	1
2. 製品の治療学的特性	1
3. 製品の製剤学的特性	1
4. 適正使用に関して周知すべき特性	1
5. 承認条件及び流通・使用上の制限事項	1
6. RMPの概要	2
II. 名称に関する項目	3
1. 販売名	3
2. 一般名	3
3. 構造式又は示性式	3
4. 分子式及び分子量	3
5. 化学名（命名法）又は本質	4
6. 慣用名、別名、略号、記号番号	4
III. 有効成分に関する項目	5
1. 物理化学的性質	5
2. 有効成分の各種条件下における安定性	5
3. 有効成分の確認試験法、定量法	5
IV. 製剤に関する項目	6
1. 剤形	6
2. 製剤の組成	7
3. 添付溶解液の組成及び容量	8
4. 力価	8
5. 混入する可能性のある夾雑物	8
6. 製剤の各種条件下における安定性	8
7. 調製法及び溶解後の安定性	10
8. 他剤との配合変化（物理化学的変化）	10
9. 溶出性	11
10. 容器・包装	17
11. 別途提供される資材類	17
12. その他	17
V. 治療に関する項目	18
1. 効能又は効果	18
2. 効能又は効果に関連する注意	18
3. 用法及び用量	18
4. 用法及び用量に関連する注意	18
5. 臨床成績	18
VI. 薬効薬理に関する項目	22
1. 薬理学的に関連ある化合物又は化合物群	22
2. 薬理作用	22
VII. 薬物動態に関する項目	24
1. 血中濃度の推移	24
2. 薬物速度論的パラメータ	28
3. 母集団（ポピュレーション）解析	28
4. 吸収	29
5. 分布	29
6. 代謝	29
7. 排泄	30

8. トランスポーターに関する情報	30
9. 透析等による除去率	30
10. 特定の背景を有する患者	30
11. その他	30
VIII. 安全性（使用上の注意等）に関する項目	31
1. 警告内容とその理由	31
2. 禁忌内容とその理由	31
3. 効能又は効果に関連する注意とその理由	31
4. 用法及び用量に関連する注意とその理由	31
5. 重要な基本的注意とその理由	31
6. 特定の背景を有する患者に関する注意	31
7. 相互作用	33
8. 副作用	36
9. 臨床検査結果に及ぼす影響	37
10. 過量投与	37
11. 適用上の注意	37
12. その他の注意	37
IX. 非臨床試験に関する項目	38
1. 薬理試験	38
2. 毒性試験	38
X. 管理的事項に関する項目	39
1. 規制区分	39
2. 有効期間	39
3. 包装状態での貯法	39
4. 取扱い上の注意	39
5. 患者向け資材	39
6. 同一成分・同効薬	39
7. 国際誕生年月日	39
8. 製造販売承認年月日及び承認番号、薬価基準収載年月日、販売開始年月日	40
9. 効能又は効果追加、用法及び用量変更追加等の年月日及びその内容	40
10. 再審査結果、再評価結果公表年月日及びその内容	40
11. 再審査期間	40
12. 投薬期間制限に関する情報	40
13. 各種コード	41
14. 保険給付上の注意	41
XI. 文献	42
1. 引用文献	42
2. その他の参考文献	42
XII. 参考資料	44
1. 主な外国での発売状況	44
2. 海外における臨床支援情報	44
XIII. 備考	45
1. 調剤・服薬支援に際して臨床判断を行うにあたっての参考情報	45
2. その他の関連資料	46

略語表

なし（個別に各項目において解説する。）

I. 概要に関する項目

1. 開発の経緯

ロスバスタチン錠 2.5mg「共創未来」、ロスバスタチン錠 5mg「共創未来」、ロスバスタチン OD 錠 2.5mg「共創未来」及びロスバスタチン OD 錠 5mg「共創未来」は、共創未来ファーマ株式会社が発行医薬品として薬食発 1121 第 2 号(平成 26 年 11 月 21 日)に基づき、規格及び試験方法を設定、安定性試験、生物学的同等性試験を実施し、2017 年 8 月に承認を取得し、2017 年 12 月に上市した。販売名変更のため、2019 年 1 月にロスバスタチン錠 2.5mg「KMP」、ロスバスタチン錠 5mg「KMP」、ロスバスタチン OD 錠 2.5mg「KMP」及びロスバスタチン OD 錠 5mg「KMP」の製造販売承認を取得、2023 年 6 月に上市した。ロスバスタチン錠 2.5mg「KMP」、ロスバスタチン錠 5mg「KMP」、ロスバスタチン OD 錠 2.5mg「KMP」及びロスバスタチン OD 錠 5mg「KMP」は、2023 年 7 月に家族性高コレステロール血症の効能又は効果の承認を取得した。

2. 製品の治療学的特性

- (1) 本剤は、コレステロール生合成の初期の律速段階を触媒する酵素、HMG-CoA 還元酵素 (hydroxymethylglutaryl-CoA reductase) の阻害剤 (スタチン類) である。
スタチン類は HMG-CoA 還元酵素を競合的に阻害することにより、HMG-CoA のメバロン酸への変換を減少させ、肝臓におけるコレステロール生成を抑制することによって血中コレステロール値を低下させる⁹⁾。(「VI.薬効薬理に関する項目 2.薬理作用」を参照)
- (2) 重大な副作用(頻度不明)として、横紋筋融解症、ミオパチー、免疫介在性壊死性ミオパチー、重症筋無力症、肝炎、肝機能障害、黄疸、血小板減少、過敏症状、間質性肺炎、末梢神経障害、多形紅斑が報告されている。(「VIII.安全性(使用上の注意等)」に関する項目 8.副作用」を参照)

3. 製品の製剤学的特性

- (1) OD 錠は舌の上に乗せ、唾液を浸潤させると崩壊するため、水なしで服用可能である、また、水で服用することもできる。(「VIII.安全性(使用上の注意等)」に関する項目 14.適用上の注意」を参照)
- (2) OD 錠は矯味剤としてスクラロース及びL-メントールを添加している。(「IV. 製剤に関する項目 2.製剤の組成」を参照)

4. 適正使用に関して周知すべき特性

適正使用に関する資料、 最適使用推進ガイドライン等	有 無	タイトル、参照先
医薬品リスク管理計画(以下 RMP)	無	
追加のリスク最小化活動として作成されている資料	無	
最適使用推進ガイドライン	無	
保険適用上の留意事項通知	無	

5. 承認条件及び流通・使用上の制限事項

- (1) 承認条件
該当しない

(2)流通・使用上の制限事項
該当しない

6. RMP の概要
該当しない

5. 化学名（命名法）又は本質

Monocalcium bis [(3R,5S,6E) -7- {4- (4-fluorophenyl) -6- (1-methylethyl) -2- [methyl (methylsulfonyl) amino] pyrimidin-5-yl} -3,5-dihydroxyhept-6-enoate] (IUPAC)

6. 慣用名、別名、略号、記号番号

該当資料なし

Ⅲ. 有効成分に関する項目

1. 物理化学的性質

(1) 外観・性状

白色の粉末である。

(2) 溶解性

1) 各種溶媒における溶解度：アセトニトリルに溶けやすく、メタノールにやや溶けやすく、水又はエタノール（99.5）に溶けにくい。

2) 各種 pH 溶媒に対する溶解度：該当資料なし

(3) 吸湿性

吸湿性である。

(4) 融点（分解点）、沸点、凝固点

該当資料なし

(5) 酸塩基解離定数

該当資料なし

(6) 分配係数

該当資料なし

(7) その他の主な示性値

該当資料なし

2. 有効成分の各種条件下における安定性

該当資料なし

3. 有効成分の確認試験法、定量法

確認試験法：日本薬局方「ロスバスタチンカルシウム」による

定量法：日本薬局方「ロスバスタチンカルシウム」による

IV. 製剤に関する項目

1. 剤形

(1) 剤形の区別

ロスバスタチン錠「KMP」：フィルムコーティング錠

ロスバスタチン OD 錠「KMP」：素錠（口腔内崩壊錠）

(2) 製剤の外観及び性状

販売名	色・剤形	外形			サイズ		
		表面	裏面	側面	直径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (mg)
ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」	うすい赤みの黄色～くす んだ赤みの黄色 フィルムコーティング錠				5.5	3.1	74
ロスバスタチン錠5mg 「KMP」	うすい赤みの黄色～くす んだ赤みの黄色 フィルムコーティング錠				7.0	3.9	146
ロスバスタチンOD錠 2.5mg 「KMP」	白色 素錠 (口腔内崩壊錠)				5.5	3.0	72
ロスバスタチンOD錠 5mg 「KMP」	白色 素錠 (口腔内崩壊錠)				7.0	3.9	144

(3) 識別コード

販売名	ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」	ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」
識別表示	ロスバスタチン 2.5 KMP	ロスバスタチン 5 KMP
記載場所	錠剤	錠剤

販売名	ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KMP」	ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」
識別表示	ロスバスタチン OD 2.5 KMP	ロスバスタチン OD 5 KMP
記載場所	錠剤	錠剤

(4) 製剤の物性^{(1)・(4)}

販売名	ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」	ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」
硬度 (N)	77	94

販売名	ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KMP」	ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」
崩壊性 (秒)	14	15
硬度 (N)	36	42

(5) その他

該当資料なし

2. 製剤の組成

(1) 有効成分（活性成分）の含量及び添加剤

1) ロスバスタチン錠「KMP」

販売名	ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」	ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」
有効成分 (1 錠中)	ロスバスタチン 2.5mg (日局ロスバスタチンカルシウムとして 2.6mg) を含有	ロスバスタチン 5mg (日局ロスバスタチンカルシウムとして 5.2mg) を含有
添加剤	D-マンニトール、低置換度ヒドロキシプロピルセルロース、クロスポビドン、ステアリン酸マグネシウム、ヒプロメロース、タルク、酸化チタン、黄色三二酸化鉄、三二酸化鉄、カルナウバロウ	

添加剤添加目的

添加剤	添加目的
D-マンニトール	賦形剤
低置換度ヒドロキシプロピルセルロース	賦形剤
クロスポビドン	崩壊剤
ステアリン酸マグネシウム	滑沢剤
ヒプロメロース	コーティング剤
タルク	コーティング剤
酸化チタン	コーティング剤
黄色三二酸化鉄	着色剤
三二酸化鉄	着色剤
カルナウバロウ	光沢化剤

2) ロスバスタチン OD 錠「KMP」

販売名	ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KMP」	ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」
有効成分 (1 錠中)	ロスバスタチン 2.5mg (日局ロスバスタチンカルシウムとして 2.6mg) を含有	ロスバスタチン 5mg (日局ロスバスタチンカルシウムとして 5.2mg) を含有
添加剤	D-マンニトール、低置換度ヒドロキシプロピルセルロース、クロスポビドン、ステアリン酸マグネシウム、スクラロース、l-メントール	

添加剤添加目的

添加剤	添加目的
D-マンニトール	賦形剤
低置換度ヒドロキシプロピルセルロース	賦形剤
クロスポビドン	崩壊剤
ステアリン酸マグネシウム	滑沢剤
スクラロース	矯味剤
l-メントール	矯味剤

(2) 電解質等の濃度

該当しない

(3) 熱量

該当しない

3. 添付溶解液の組成及び容量

該当しない

4. 力価

該当しない

5. 混入する可能性のある夾雑物

名称・化合物名	化学式	構造式
ケト誘導体	(3 <i>R</i> ,6 <i>E</i>)-7-[4-(4-fluorophenyl)-6-(1-methylethyl)-2-[methyl(methylsulfonyl)amino]pyrimidin-5-yl]-3-hydroxy-5-oxohept-6-enoic acid	
ラクトン体	<i>N</i> [4-(4-fluorophenyl)-5-[(<i>E</i>)-2-[(2 <i>S</i> , 4 <i>R</i>)-4-hydroxy-6-oxotetrahydro-2 <i>H</i> pyran-2-yl]ethenyl]-6-(1-methylethyl)pyrimidin-2-yl]- <i>N</i> -methylmethansulfonamide	

6. 製剤の各種条件下における安定性

(1) ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」⁽¹⁾

加速試験：

保存条件	保存形態	保存期間	結果
40±1℃、75±5%RH	最終包装形態 (PTP 包装品)	6 ヶ月	規格内
40±1℃、75±5%RH	最終包装形態 (バラ包装品)	6 ヶ月	規格内

項目：性状、確認試験、純度試験：類縁物質、製剤均一性、溶出性、含量

無包装状態の安定性：

試験の種類	保存条件	保存形態	保存期間	結果
加温	40℃、遮光	気密 (褐色ガラス瓶)	3 ヶ月	類縁物質のわずかな増加 (規格内)
加湿	25℃、75%RH、遮光	開放 (褐色ガラス瓶)	3 ヶ月	類縁物質のわずかな増加 (規格内)、硬度の低下
曝光	3,000Lux (25℃、60%RH)	開放 (シャーレ)	60 万 Lux・hr	変化なし
			120 万 Lux・hr	色調変化 (規格内)

項目：性状、純度試験：類縁物質、溶出性、定量、純度試験：光学異性体 (参考)、硬度 (参考)

(2) ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」⁽²⁾

加速試験：

保存条件	保存形態	保存期間	結果
40±1℃、75±5%RH	最終包装形態 (PTP 包装品)	6 ヶ月	規格内
40±1℃、75±5%RH	最終包装形態 (バラ包装品)	6 ヶ月	規格内

項目：性状、確認試験、純度試験：類縁物質、製剤均一性、溶出性、含量

無包装状態の安定性：

試験の種類	保存条件	保存形態	保存期間	結果
加温	40℃、遮光	気密 (褐色ガラス瓶)	3 ヶ月	類縁物質のわずかな増加 (規格内)
加湿	25℃、75%RH、遮光	開放 (褐色ガラス瓶)	3 ヶ月	類縁物質のわずかな増加 (規格内)、硬度の低下
曝光	3,000Lux (25℃、60%RH)	開放 (シャーレ)	60 万 Lux・hr	変化なし
			120 万 Lux・hr	色調変化 (規格内)

項目：性状、純度試験：類縁物質、溶出性、定量、純度試験：光学異性体 (参考)、硬度 (参考)

(3) ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KMP」⁽³⁾

加速試験：

保存条件	保存形態	保存期間	結果
40±1℃、75±5%RH	最終包装形態 (PTP 包装品)	6 ヶ月	規格内

項目：性状、確認試験、純度試験：類縁物質、製剤均一性、崩壊性、溶出性、含量

長期保存試験

保存条件	保存形態	保存期間	結果
25±2℃、60±5%RH	最終包装形態 (PTP 包装品)	36 ヶ月	規格内

項目：性状、確認試験、純度試験：類縁物質、製剤均一性、崩壊性、溶出性、含量

苛酷安定性試験：

試験の種類	保存条件	保存形態	保存期間	結果
加温	50℃、遮光	PTP/アルミ袋 (乾燥剤入り)	3 ヶ月	類縁物質増加 (規格内)
			6 ヶ月	類縁物質増加 (規格外)
曝光	3,000Lux (25℃、60%RH)	PTP/アルミ袋 (乾燥剤入り)	120 万 Lux・hr	変化なし

項目：性状、純度試験：類縁物質、崩壊性、溶出性、定量、純度試験：光学異性体 (参考)、硬度 (参考)

無包装状態の安定性：

試験の種類	保存条件	保存形態	保存期間	結果
加湿	25℃、75%RH、遮光	開放 (褐色ポリエチレン容器)	3 ヶ月	類縁物質増加 (規格内)
曝光	3,000Lux (25℃、60%RH)	開放 (シャーレ)	60 万 Lux・hr	着色 (規格外)、類縁物質増加 (規格外)、溶出率低下 (規格外)、含量低下 (規格外)

項目：性状、純度試験：類縁物質、崩壊性、溶出性、定量、純度試験：光学異性体 (参考)、硬度 (参考)

(4) ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」⁽⁴⁾

加速試験：

保存条件	保存形態	保存期間	結果
40±1℃、75±5%RH	最終包装形態 (PTP 包装品)	6 ヶ月	規格内

項目：性状、確認試験、純度試験：類縁物質、製剤均一性、崩壊性、溶出性、含量

長期保存試験

保存条件	保存形態	保存期間	結果
25±2℃、60±5%RH	最終包装形態 (PTP 包装品)	36 ヶ月	規格内

項目：性状、確認試験、純度試験：類縁物質、含量均一性試験、崩壊性、溶出性、含量

苛酷安定性試験：

試験の種類	保存条件	保存形態	保存期間	結果
加温	50℃、遮光	PTP/アルミ袋 (乾燥剤入り)	3 ヶ月	類縁物質増加 (規格内)
			6 ヶ月	類縁物質増加 (規格外)
曝光	3,000Lux (25℃、60%RH)	PTP/アルミ袋 (乾燥剤入り)	120 万 Lux・hr	変化なし

項目：性状、純度試験：類縁物質、崩壊性、溶出性、定量、純度試験：光学異性体 (参考)、硬度 (参考)

無包装状態の安定性：

試験の種類	保存条件	保存形態	保存期間	結果
加湿	25℃、 75%RH、遮光	開放 (褐色ポリエチレン容器)	3 ヶ月	類縁物質増加 (規格内)、硬度 (やや変化あり)
曝光	3,000Lux (25℃、60%RH)	開放 (シャーレ)	60 万 Lux・hr	着色 (規格外)、類縁物質増加 (規格外)、含量低下 (規格外)
			120 万 Lux・hr	着色 (規格外)、類縁物質増加 (規格外)、溶出率低下 (規格外)、含量低下 (規格外)

項目：性状、純度試験：類縁物質、崩壊性、溶出性、定量、純度試験：光学異性体 (参考)、硬度 (参考)

7. 調製法及び溶解後の安定性

該当しない

8. 他剤との配合変化 (物理化学的变化)

該当資料なし

9. 溶出性

(1) ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」^⑤

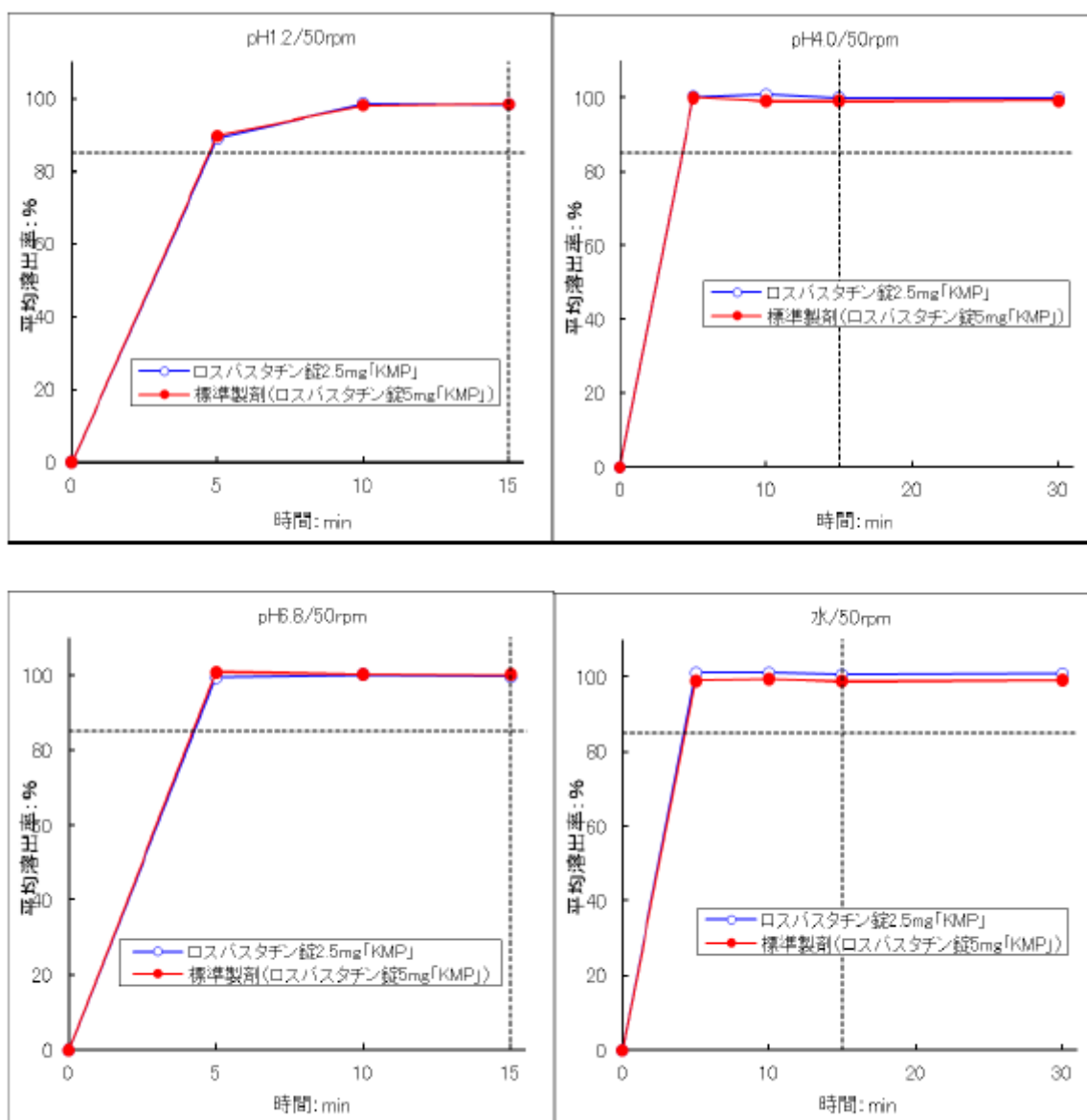
1) 溶出挙動

ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」は、日本薬局方医薬品各条に定められたロスバスタチンカルシウム錠の溶出規格に適合していることが確認されている。

2) 生物学的同等性試験

ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」について、「含量が異なる経口固形剤の生物学的同等性試験ガイドライン（平成 24 年 2 月 29 日 薬食審査発 0229 第 10 号）」（以下、ガイドライン）に従い溶出試験を行った。

①平均溶出率での判定



判定基準

pH1.2/50rpm : 15 分以内に平均 85%以上溶出

pH4.0/50rpm : 15 分以内に平均 85%以上溶出

pH6.8/50rpm : 15 分以内に平均 85%以上溶出

水/50rpm : 15 分以内に平均 85%以上溶出

②個々の溶出率での判定

試験条件		溶出時間 (分)	ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」の溶出率			同等性の判定基準 (ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」の 個々検体 (n=12) の溶出条件)	判定
			最小値 (%)	最大値 (%)	平均溶出率 (%)		
50rpm	pH1.2	15	96.9	100.4	98.3	最終比較時点での個々の溶出率が平均 溶出率±15%の範囲を超えるものが 12 個中 1 個以下で、±25%の範囲を 超えるものがない。	適
	pH4.0	15	97.1	102.0	99.8		適
	pH6.8	15	97.0	104.3	99.7		適
	水	15	98.5	103.1	100.5		適

上記の結果より、試験条件それぞれについて、ガイドラインの溶出挙動の同等性の判定基準に適合した。
従って、ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」と標準製剤の溶出挙動は同等であると判断した。

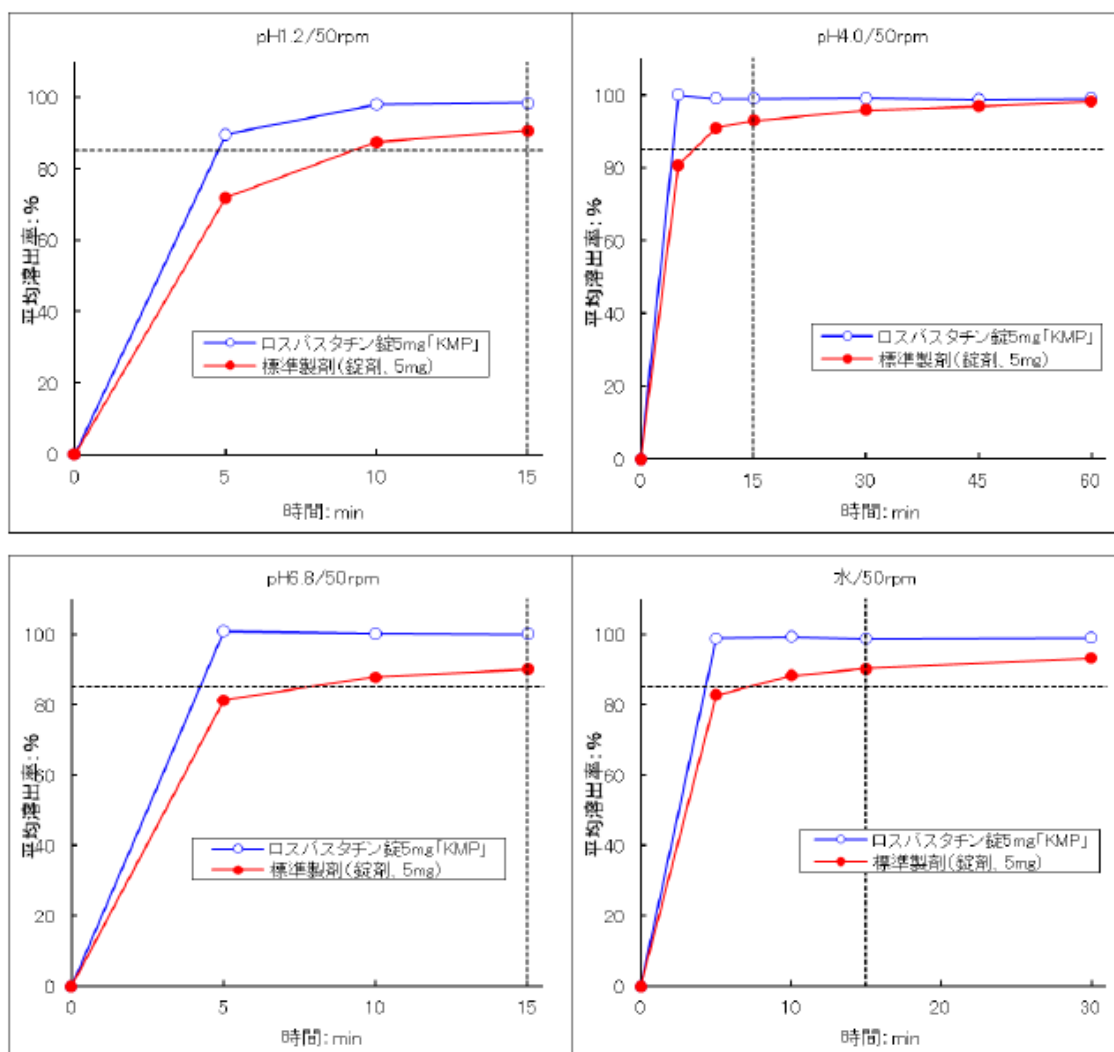
(2) ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」⁽⁶⁾

1) 溶出挙動

ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」は、日本薬局方医薬品各条に定められたロスバスタチンカルシウム錠の溶出規格に適合していることが確認されている。

2) 生物学的同等性試験

ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」について、「後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン（平成 24 年 2 月 29 日 薬食審査発 0229 第 10 号）」（以下、ガイドライン）に従い溶出試験を行った。



判定基準

pH1.2/50rpm : 15 分以内に平均 85%以上溶出

pH4.0/50rpm : 15 分以内に平均 85%以上溶出

pH6.8/50rpm : 15 分以内に平均 85%以上溶出

水 /50rpm : 15 分以内に平均 85%以上溶出

上記の結果より、試験条件それぞれについて、ガイドラインの溶出挙動の類似性の判定基準に適合した。従って、ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」と標準製剤の溶出挙動は類似していると判断した。

(3) ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KMP」⁽⁷⁾

1) 規格及び試験方法

ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KMP」は、設定された溶出規格に適合していることが確認されている。

方 法：日局溶出試験法(パドル法)

試験液：溶出試験第 2 液 900mL

回転数：50rpm

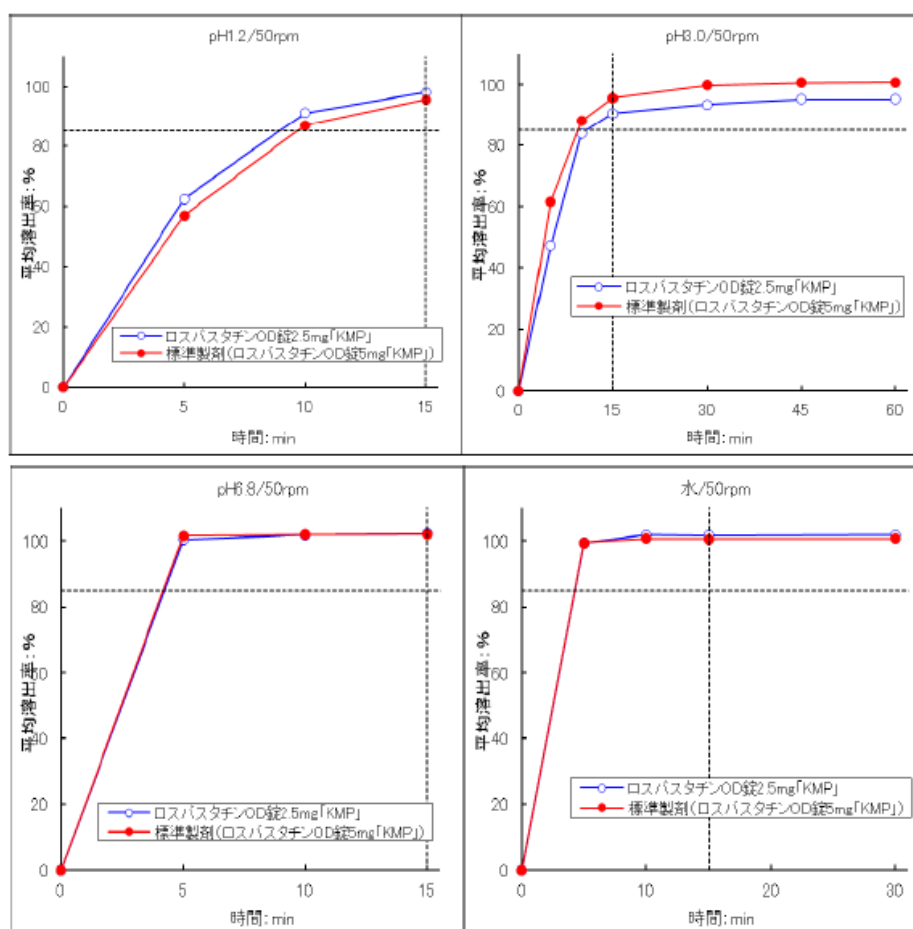
測定法：液体クロマトグラフィー

規 格：15 分間の溶出率が 85%以上であるときは適合とする。

2) 生物学的同等性試験

ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KMP」について、「含量が異なる経口固形剤の生物学的同等性試験ガイドライン（平成 24 年 2 月 29 日薬食審査発 0229 第 10 号）」（以下、ガイドライン）に従い溶出試験を行った。

①平均溶出率での判定



判定基準

pH1.2/50rpm：15 分以内に平均 85%以上溶出

pH3.0/50rpm：15 分以内に平均 85%以上溶出

pH6.8/50rpm：15 分以内に平均 85%以上溶出

水 /50rpm：15 分以内に平均 85%以上溶出

②個々の溶出率での判定

試験条件		溶出時間 (分)	ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KMP」の溶出率			同等性の判定基準 (ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KMP」の個々検体 (n=12) の 溶出条件)	判定
			最小値 (%)	最大値 (%)	平均溶出 率 (%)		
50rpm	pH1.2	15	96.1	100.3	98.1	最終比較時点での個々の溶出率が 平均溶出率±15%の範囲を超える ものが12個中1個以下で、± 25%の範囲を超えるものがない。	適
	pH3.0	15	88.5	93.6	90.5		適
	pH6.8	15	100.8	103.6	102.2		適
	水	15	100.0	102.9	101.7		適

上記の結果より、試験条件それぞれについて、ガイドラインの溶出挙動の同等性の判定基準に適合した。従って、ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KMP」と標準製剤の溶出挙動は同等であると判断した。

(4) ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」⁽⁸⁾

1) 規格及び試験方法

ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」は、設定された溶出規格に適合していることが確認されている。

方 法：日局溶出試験法(パドル法)

試験液：溶出試験第 2 液 900mL

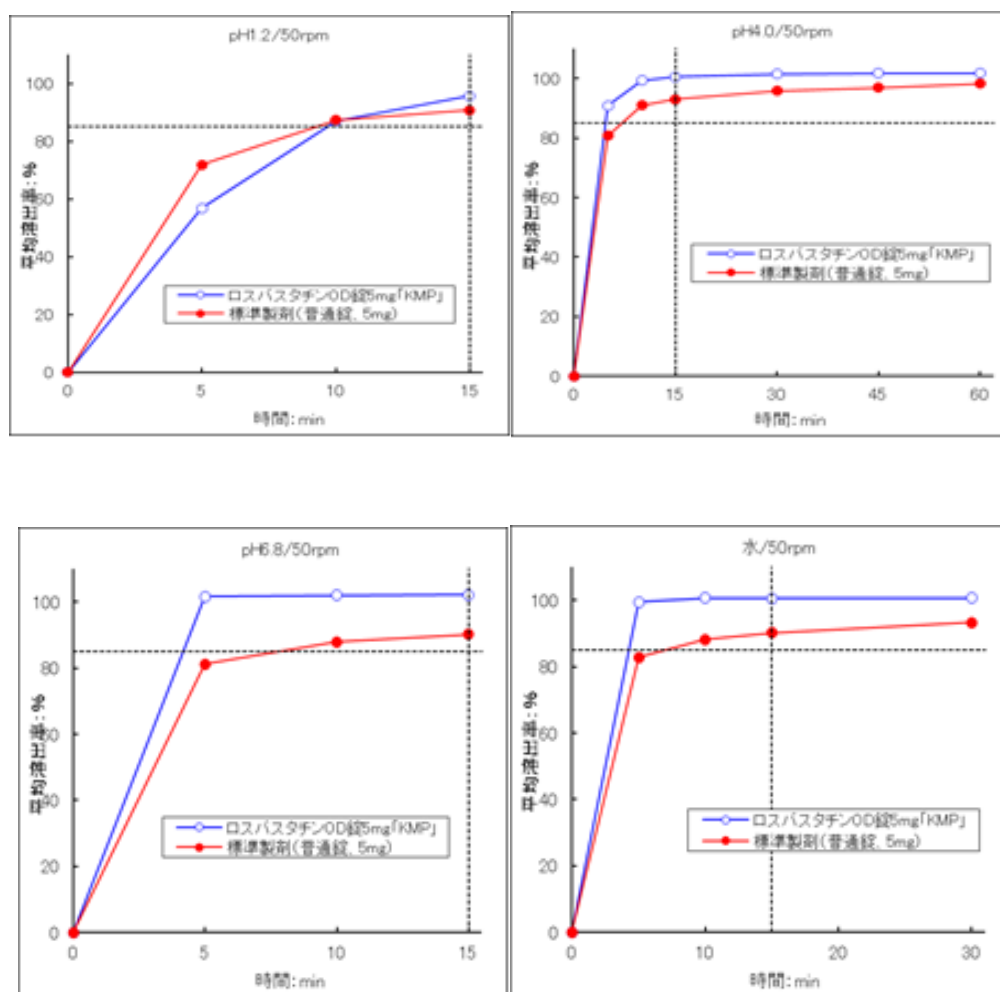
回転数：50rpm

測定法：液体クロマトグラフィー

規 格：15 分間の溶出率が 85%以上であるときは適合とする。

2) 生物学的同等性試験

ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」について、「後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン（平成 24 年 2 月 29 日薬食審査発 0229 第 10 号）」（以下、ガイドライン）に従い溶出試験を行った。



判定基準

pH1.2/50rpm：15 分以内に平均 85%以上溶出

pH4.0/50rpm：15 分以内に平均 85%以上溶出

pH6.8/50rpm：15 分以内に平均 85%以上溶出

水 /50rpm：15 分以内に平均 85%以上溶出

上記の結果より、試験条件それぞれについて、ガイドラインの溶出挙動の類似性の判定基準に適合した。従って、ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」と標準製剤の溶出挙動は類似していると判断した。

10. 容器・包装

(1) 注意が必要な容器・包装、外観が特殊な容器・包装に関する情報
該当しない

(2) 包装

ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」:

(PTP) 100 錠 (10 錠×10×1 袋)
500 錠 (10 錠×10×5 袋)
1000 錠 (10 錠×10×10 袋)
(バラ) 500 錠

ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」:

(PTP) 100 錠 (10 錠×10×1 袋)
500 錠 (10 錠×10×5 袋)
(バラ) 500 錠

ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KMP」:

(PTP) 100 錠 (10 錠×10×1 袋)
500 錠 (10 錠×10×5 袋)

ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」:

(PTP) 100 錠 (10 錠×10×1 袋)

(3) 予備容量

該当しない

(4) 容器の材質

PTP 包装

PTP: ポリプロピレン、アルミ箔

アルミピロー: ポリエチレン、アルミ箔、ポリエチレンテレフタレート (ロスバスタチン錠は乾燥剤 (塩化カルシウム) 入り)

バラ包装

ボトル: ポリエチレン

キャップ: ポリプロピレン (乾燥剤 (シリカゲル) 付き)

11. 別途提供される資材類

該当資料なし

12. その他

錠剤等の一包化調剤に用いる自動調剤分包機での落下耐久性等の各種調剤機器適合性: 有
(「XIII.備考 2.その他の関連資料」を参照)

V. 治療に関する項目

1. 効能又は効果

4. 効能又は効果

高コレステロール血症、家族性高コレステロール血症

2. 効能又は効果に関連する注意

5. 効能又は効果に関連する注意

5.1 適用の前に十分な検査を実施し、高コレステロール血症、家族性高コレステロール血症であることを確認した上で本剤の適用を考慮すること。

5.2 家族性高コレステロール血症ホモ接合体については、LDL-アフェレーシス等の非薬物療法の補助として、あるいはそれらの治療法が実施不能な場合に本剤の適用を考慮すること。

3. 用法及び用量

(1) 用法及び用量の解説

6. 用法及び用量

通常、成人にはロスバスタチンとして1日1回2.5mgより投与を開始するが、早期にLDL-コレステロール値を低下させる必要がある場合には5mgより投与を開始してもよい。なお、年齢・症状により適宜増減し、投与開始後あるいは増量後、4週以降にLDL-コレステロール値の低下が不十分な場合には、漸次10mgまで増量できる。10mgを投与してもLDL-コレステロール値の低下が十分でない、家族性高コレステロール血症患者などの重症患者に限り、さらに増量できるが、1日最大20mgまでとする。

(2) 用法及び用量の設定経緯・根拠

該当資料なし

4. 用法及び用量に関連する注意

7. 用法及び用量に関連する注意

7.1 クレアチニンクリアランスが30mL/min/1.73m²未満の患者に投与する場合には、2.5mgより投与を開始し、1日最大投与量は5mgとする。[9.2.2、9.2.3、16.6.3 参照]

7.2 特に20mg投与時においては腎機能に影響があらわれるおそれがある。20mg投与開始後12週までの間は原則、月に1回、それ以降は定期的（半年に1回等）に腎機能検査を行うなど、観察を十分に行うこと。[9.2.2、9.2.3、16.6.3 参照]

5. 臨床成績

(1) 臨床データパッケージ

該当資料なし

(2) 臨床薬理試験

該当資料なし

(3) 用量反応探索試験

該当資料なし

(4) 検証的試験

1) 有効性検証試験

17. 臨床成績

17.1 有効性及び安全性に関する試験

〈高コレステロール血症〉

17.1.1 海外第Ⅲ相用量反応試験^{34), 35)}

高コレステロール血症患者を対象として二重盲検法により実施された試験において、ロスバスタチンカルシウム（5～80mg）又はアトルバスタチン（10～80mg）を1日1回6週間投与した結果、ロスバスタチンカルシウムは、LDL-コレステロール、総コレステロール、トリグリセリドには低下効果を、HDL-コレステロールには増加効果を示した。また、アポ蛋白 B、非 HDL-コレステロールを低下させ、アポ蛋白 A-I を増加させた。更に、LDL-コレステロール/HDL-コレステロール比、総コレステロール/HDL-コレステロール比、非 HDL-コレステロール/HDL-コレステロール比、アポ蛋白 B/アポ蛋白 A-I 比を低下させた。ロスバスタチンカルシウムの薬効は、投与後1週間以内にあらわれ、通常2週間までに最大効果の90%となった。最大効果は通常4週間までにあらわれ、その後持続した。

副作用発現頻度は、ロスバスタチンカルシウム5mg 投与群で10.5%（4/38例）、10mg 投与群では15.6%（7/45例）、及び20mg 投与群で17.9%（7/39例）であった。いずれの投与群でも、3例以上発現した副作用はなかった。

17.1.2 国内第Ⅱ相試験³⁶⁾

二重盲検法により実施された試験において、ロスバスタチンカルシウム2.5～20mg を1日1回6週間投与した際の血清脂質値の平均変化率は表1のとおりであった。

表1 血清脂質値の平均変化率（高コレステロール血症患者対象試験）

投与量	2.5mg (n=17)	5mg (n=12)	10mg (n=14)	20mg (n=18)
LDL-コレステロール (%)	-44.99	-52.49	-49.60	-58.32
総コレステロール (%)	-31.59	-36.40	-34.60	-39.58
トリグリセリド (%)	-17.35	-23.58	-19.59	-17.01
HDL-コレステロール (%)	7.64	9.09	14.04	11.25
アポ蛋白 B (%)	-38.56	-45.93	-43.97	-50.38
アポ蛋白 A-I (%)	5.42	6.25	10.61	9.72
アポ蛋白 A-II (%)	0.38	4.27	7.78	7.73

副作用発現頻度は、ロスバスタチンカルシウム2.5mg 投与群で38.9%（7/18例）、5mg 投与群で20.0%（3/15例）、10mg 投与群で13.3%（2/15例）、及び20mg 投与群で47.4%（9/19例）であった。計67例において3例以上認められた副作用は、腹痛、CK上昇及びγ-GTP上昇（各3例）であった。

17.1.3 海外第Ⅲ相試験³⁷⁾

二重盲検法により実施された3試験の集積データをまとめた。ロスバスタチンカルシウム5mg 又は10mg を1日1回12週間投与した際の血清脂質の平均変化率は表2のとおりであり、高コレステロール血症患者の脂質レベルを総合的に改善することが認められた。

表2 血清脂質値の平均変化率（外国人高コレステロール血症患者対象試験）

投与量	5mg (n=390)	10mg (n=389)
LDL-コレステロール (%)	-41.9	-46.7
総コレステロール (%)	-29.6	-33.0
トリグリセリド (%)	-16.4	-19.2
HDL-コレステロール (%)	8.2	8.9
非HDL-コレステロール (%)	-38.2	-42.6
アポ蛋白B (%)	-32.7	-36.5
アポ蛋白A-I (%)	6.0	7.3

17.1.4 海外第Ⅲ相長期投与試験^{38), 39)}

高コレステロール血症患者を対象として二重盲検法により実施された試験において、ロスバスタチンカルシウム 5mg 又は 10mg から投与を開始し、LDL-コレステロール値がNCEP IIガイドラインの目標値に達するまで増量した。52週時において初回投与量の5mg 又は 10mg の継続投与を受けていた症例の割合は、それぞれ76% (92/121例) 及び82% (88/107例) であった。

副作用の発現率はロスバスタチンカルシウム 5mg 群で29.4% (40/136例)、ロスバスタチンカルシウム 10mg 群で26.5% (35/132例) であった。いずれかの投与群で3例以上発現した副作用は下痢、消化不良、鼓腸、筋痛、不眠症、発疹、腹痛及び無力症であった。

〈家族性高コレステロール血症〉

17.1.5 国内第Ⅱ相長期投与試験^{40), 41)}

家族性高コレステロール血症ヘテロ接合体患者にロスバスタチンカルシウム 10mg から投与を開始し、6週間隔で強制増量した。そのときの血清脂質値の平均変化率は表3のとおりであった。

表3 血清脂質値の平均変化率
(家族性高コレステロール血症患者対象試験)

投与量	10mg (n=37)	20mg (n=37)
LDL-コレステロール (%)	-49.2	-53.9
総コレステロール (%)	-39.4	-43.3
トリグリセリド (%)	-18.2	-23.6
HDL-コレステロール (%)	9.6	13.8

3例以上に認められた副作用はCK上昇 (3/37例、8.1%) であった。

2) 安全性試験

該当資料なし

(5) 患者・病態別試験

該当資料なし

(6) 治療的使用

- 1) 使用成績調査（一般使用成績調査、特定使用成績調査、使用成績比較調査）、製造販売後データベース調査、製造販売後臨床試験の内容
該当資料なし
- 2) 承認条件として実施予定の内容又は実施した調査・試験の概要
該当資料なし

(7) その他

該当資料なし

VI. 薬効薬理に関する項目

1. 薬理学的に関連ある化合物又は化合物群

HMG-CoA 還元酵素阻害剤（プラバスタチンナトリウム、シンバスタチン、フルバスタチンナトリウム、アトルバスタチンカルシウム、ピタバスタチンカルシウム）

注意：関連のある化合物の効能・効果等は最新の電子添文を参照すること。

2. 薬理作用

(1) 作用部位・作用機序

18. 薬効薬理

18.1 作用機序

ロスバスタチンカルシウムは、肝臓内に能動的に取り込まれ、肝臓でのコレステロール合成系の律速酵素である HMG-CoA 還元酵素を選択的かつ競合的に阻害し、コレステロール合成を強力に抑制する。その結果、肝臓内のコレステロール含量が低下し、これを補うため LDL 受容体の発現が誘導される。この LDL 受容体を介して、コレステロール含有率の高いリポ蛋白である LDL の肝臓への取り込みが増加し、血中コレステロールが低下する。ロスバスタチンカルシウムは、肝臓では主として能動輸送系を介して取り込まれ、脂質親和性が比較的低いため、能動輸送系を持たない他の臓器には取り込まれにくく、肝特異的な HMG-CoA 還元酵素阻害剤であると考えられる^{42), 43)}。

(2) 薬効を裏付ける試験成績

18.1.1 HMG-CoA 還元酵素阻害作用

ロスバスタチンカルシウムは、ラット及びヒト肝ミクロソーム由来の HMG-CoA 還元酵素及びヒト HMG-CoA 還元酵素の触媒ドメインに対して阻害作用を示した (*in vitro*)⁴⁴⁾。

18.1.2 肝コレステロール合成阻害作用

ロスバスタチンカルシウムは、ラット肝細胞のコレステロール合成を用量依存的に阻害した。また、その阻害作用は、他の HMG-CoA 還元酵素阻害剤に比べて長期間持続した⁴⁴⁾。

18.1.3 LDL 受容体誘導作用

ロスバスタチンカルシウムは、ヒト肝癌由来 HepG2 細胞の LDL 受容体 mRNA の発現を濃度依存的に誘導し、また、LDL 結合活性を増加させた (*in vitro*)⁴⁵⁾。

18.2 血中コレステロール低下作用

ロスバスタチンカルシウムは、イヌ⁴⁶⁾、カニクイザル⁴⁷⁾、WHHL ウサギ（ヒト家族性高コレステロール血症のモデル動物）⁴⁸⁾ において血清総コレステロールを、また、アポ蛋白 E*3Leiden トランスジェニックマウス（高 VLDL 血症モデル動物）⁴⁹⁾ 及びヒトアポ蛋白 B/CETP（コレステロールエステル転送蛋白）トランスジェニックマウス（ヒトのコレステロール代謝に類似した脂質代謝環境を有するモデル動物）⁵⁰⁾ においては血漿中コレステロールを有意に低下させた。イヌにおいては、HMG-CoA 還元酵素の反応産物であるメバロン酸の血中濃度を用量依存的に低下させた⁴⁶⁾。

18.3 動脈硬化進展抑制作用

ロスバスタチンカルシウムは、WHHL ウサギにおいて、大動脈の脂質沈着面積、コレステロール含量の低下をもたらし、動脈硬化病変の進展を抑制した⁴⁸⁾。

18.4 トリグリセリド低下作用

ロスバスタチンカルシウムは、アポ蛋白 E*3Leiden トランスジェニックマウス及びヒトアポ蛋白 B/CETP トランスジェニックマウスの血漿中トリグリセリドを低下させた^{49), 50)}。

- (3) 作用発現時間・持続時間
該当資料なし

VII. 薬物動態に関する項目

1. 血中濃度の推移

(1) 治療上有効な血中濃度

該当資料なし

(2) 臨床試験で確認された血中濃度

16.1.1 単回投与

健康成人男性 6 例にロスバスタチンカルシウムを 5mg の用量で空腹時に単回経口投与したところ、血漿中ロスバスタチン濃度は投与後 5 時間に C_{max} を示し、消失半減期 ($t_{1/2}$) は 20.2 ± 7.8 時間であった。また、 C_{max} 及び AUC_{0-24h} はそれぞれ $3.56 \pm 1.35 \text{ ng/mL}$ 及び $31.3 \pm 13.6 \text{ ng} \cdot \text{h/mL}$ であった (平均値 \pm SD) ²⁾。
なお、ロスバスタチンの体内動態は線形であると考えられている (外国人データ) ³⁾。

16.1.2 反復投与

健康成人男性 6 例にロスバスタチンカルシウム 10 及び 20mg を 1 日 1 回 7 日間、空腹時に反復経口投与したところ、投与後 24 時間の血漿中ロスバスタチン濃度は徐々に上昇し、反復投与 3 回目にはほぼ定常状態に到達した ⁴⁾。定常状態における AUC_{0-24h} は単回投与時の 1.2 倍であり、その値は単回投与での結果からの予測値と同程度であった。したがって、反復投与による予想以上の蓄積性はないと考えられた。なお、日本人における C_{max} 及び AUC は外国人の約 2 倍であった ⁵⁾。

表 1 健康成人男性におけるロスバスタチンの薬物動態パラメータ (n=6)

用量 (mg)		$C_{max}^a)$ (ng/mL)	$T_{max}^b)$ (h)	$AUC_{0-24h}^a)$ (ng·h/mL)	$AUC_{0-\infty}^a)$ (ng·h/mL)	$t_{1/2}^c)$ (h)
10	単回	7.87 (54.4)	5 (4-5)	74.2 (56.0)	126 (39.3) ^{d)}	$15.1 \pm 5.36^d)$
	反復	9.38 (71.5)	5 (5-5)	90.5 (67.0)	167 (30.0) ^{e)}	$18.4 \pm 4.62^e)$
20	単回	20.5 (54.6)	4 (3-5)	171 (53.0)	209 (50.1)	19.1 ± 5.81
	反復	22.1 (68.0)	5 (5-5)	206 (63.9)	248 (62.2)	14.8 ± 5.76

a) 幾何平均値 (変動係数)、b) 中央値 (範囲)、c) 平均値 \pm SD

d) n=3、e) n=4

高コレステロール血症患者にロスバスタチンカルシウム 2.5~20mg を 1 日 1 回 6 週間反復経口投与し、定常状態の血漿中ロスバスタチン濃度を測定した ⁶⁾。高コレステロール血症患者の血漿中ロスバスタチン濃度は用量にほぼ比例して増加し、健康成人男性での値 (投与後 10 時間の幾何平均値、10mg : 4.06 ng/mL 、20mg : 9.82 ng/mL) とほぼ同程度であった。なお、本試験で日本人と外国人の結果を比較したところ、日本人における定常状態の血漿中ロスバスタチン濃度は外国人の約 2 倍であった ⁷⁾。

表 2 高コレステロール血症患者における定常状態の血漿中ロスバスタチン濃度

投与量	血漿中ロスバスタチン濃度 (ng/mL)
2.5mg (n=16)	1.26 (72.7)
5mg (n=12)	2.62 (41.5)
10mg (n=13)	4.17 (75.5)
20mg (n=17)	11.7 (50.0)

幾何平均値 (変動係数) 採血時間 : 投与後 7~16 時間

16.1.3 投与時間の影響

外国人健康成人 21 例にロスバスタチンカルシウム 10mg をクロスオーバー法で 1 日 1 回 14 日間、午前 7 時あるいは午後 6 時に経口投与したところ、血漿中ロスバスタチン濃度推移は両投与時間で同様であり、ロスバスタチンカルシウムの体内動態は投与時間の影響を受けないと考えられた⁸⁾。

<生物学的同等性試験>

1) ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」

ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」は、「含量が異なる経口固形製剤の生物学的同等性試験ガイドライン（平成 24 年 2 月 29 日 薬食審査発 0229 第 10 号）」に基づき、ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」を標準製剤としたとき、溶出挙動が同等と判断され、生物学的に同等とみなされた。（「IV.製剤に関する項目 9.溶出性」を参照）

2) ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」⁽¹⁰⁾

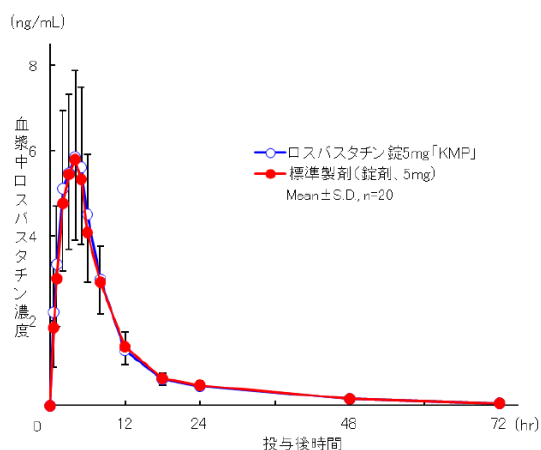
「後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン」（平成 24 年 2 月 29 日 薬食審査発 0229 第 10 号）に従い、ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」と標準製剤^(注)を、クロスオーバー法によりそれぞれ 1 錠（ロスバスタチンとして 5mg）健康成人男子に絶食単回経口投与して血漿中未変化体濃度を測定した。得られた薬物動態パラメータ（AUC、C_{max}）について 90%信頼区間法にて統計解析を行った結果、log(0.80)～log(1.25)の範囲であり、両剤の生物学的同等性が確認された。

注) クレストール錠 5mg

薬物動態パラメータ

	判定パラメータ		参考パラメータ	
	AUC _{0→72} (ng・hr/mL)	C _{max} (ng/mL)	t _{max} (hr)	t _{1/2} (hr)
ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」	63.06 ± 15.15	6.235 ± 2.034	4.3 ± 1.1	16.0 ± 4.8
標準製剤 (錠剤、5mg)	61.89 ± 12.57	6.131 ± 1.800	3.9 ± 0.9	15.8 ± 3.9

(Mean ± S.D., n=20)



血漿中ロスバスタチン濃度推移

血漿中濃度並びに AUC、C_{max} 等のパラメータは、被験者の選択、体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

両製剤の判定パラメータの対数変換値の平均値の差の 90%信頼区間

パラメータ	AUC _{0→72}	C _{max}
平均値の差の 90%信頼区間	log(0.9525)～log(1.0711)	log(0.9377)～log(1.0853)

3) ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KMP」

ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KMP」 は、「含量が異なる経口固形製剤の生物学的同等性試験ガイドライン（平成 24 年 2 月 29 日 薬食審査発 0229 第 10 号）」に基づき、ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」を標準製剤としたとき、溶出挙動が同等と判断され、生物学的に同等とみなされた。（「IV.製剤に関する項目 9.溶出性」を参照）

4) ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」⁽¹¹⁾

「後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン」（平成 24 年 2 月 29 日 薬食審査発 0229 第 10 号）に従い、ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」（水なし又は水で服用）と標準製剤^(注) [普通錠]（水で服用）を、クロスオーバー法によりそれぞれ 1 錠（ロスバスタチンとして 5mg）健康成人男子に絶食単回経口投与して血漿中未変化体濃度を測定した。得られた薬物動態パラメータ（AUC、C_{max}）について 90%信頼区間法にて統計解析を行った結果、log(0.80)～log(1.25)の範囲であり、両剤の生物学的同等性が確認された。

注) クレストール錠 5mg

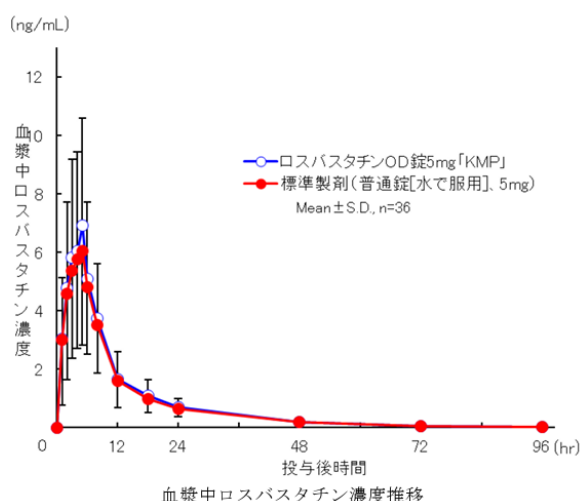
薬物動態パラメータ

		AUC ₀₋₉₆ (ng・hr/mL)	C _{max} (ng/mL)	t _{max} (hr)	t _{1/2} (hr)
水なし投与※	ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」	77.11 ± 36.46	7.182 ± 3.795	4.4 ± 0.8	14.7 ± 3.9
	標準製剤（錠剤、5mg）	72.42 ± 33.86	6.515 ± 3.304	4.3 ± 1.1	16.6 ± 7.1
水あり投与	ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」	73.92 ± 43.37	6.538 ± 3.767	4.7 ± 0.6	15.1 ± 4.5
	標準製剤（錠剤、5mg）	74.58 ± 42.21	6.681 ± 3.991	4.7 ± 1.2	15.2 ± 5.0

(Mean ± S.D., n=36 (水なし投与), n=23 (水あり投与))

※標準製剤は水で服用

1) 水なし投与

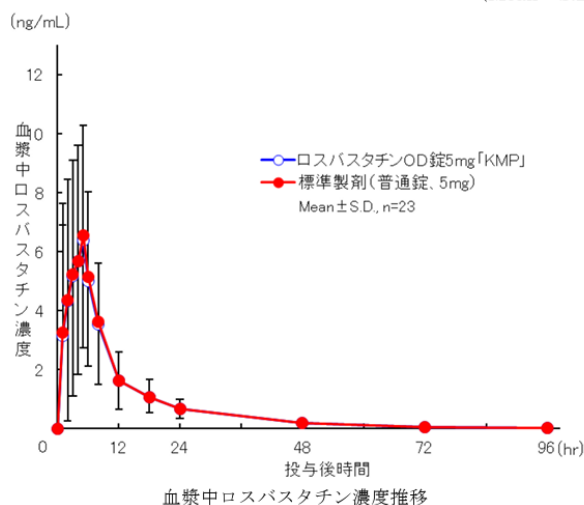


血漿中濃度並びに AUC、C_{max} 等のパラメータは、被験者の選択、体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

両製剤の判定パラメータの対数変換値の平均値の差の 90%信頼区間

パラメータ	AUC _{0→96}	C _{max}
平均値の差の 90%信頼区間	log(1.0079)~log(1.1234)	log(1.0175)~log(1.1853)

2) 水あり投与



血漿中濃度並びに AUC、C_{max} 等のパラメータは、被験者の選択、体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

両製剤の判定パラメータの対数変換値の平均値の差の 90%信頼区間

パラメータ	AUC _{0→96}	C _{max}
平均値の差の 90%信頼区間	log(0.9321)~log(1.0541)	log(0.9252)~log(1.0671)

(3) 中毒域

該当資料なし

(4) 食事・併用薬の影響

16.2.2 食事の影響

外国人健康成人 20 例にロスバスタチンカルシウム 10mg をクロスオーバー法で 1 日 1 回 14 日間、空腹時（食後 3 時間）あるいは食後に経口投与した¹³⁾。食後投与したときのロスバスタチンカルシウムの吸収は空腹時に比べて緩やかであり、C_{max} は食事によって 20%低下した。しかし、食後投与時の AUC_{0-24h} は空腹時投与の 94%であり、ロスバスタチンカルシウムの吸収量への食事の影響はないと考えられた。

16.7 薬物相互作用

16.7.1 制酸剤

制酸剤を同時併用投与した場合、ロスバスタチンの C_{max} 及び AUC_{0-24h} はそれぞれ 50%及び 46%まで低下したが、ロスバスタチン投与後 2 時間に制酸剤を投与した場合には、ロスバスタチンの C_{max} 及び AUC_{0-24h} はそれぞれ非併用時の 84%及び 78%であった（外国人データ）²⁰⁾。[10.2 参照]

16.7.2 シクロスポリン

シクロスポリンを投与されている心臓移植患者にロスバスタチンを併用投与したとき、ロスバスタチンの C_{max} 及び AUC_{0-24h} は、健康成人に単独で反復投与したときに比べてそれぞれ 10.6 倍及び 7.1 倍上昇した（外国人データ）²¹⁾。ロスバスタチンは OATP1B1 を介して肝臓に取り込まれ、シクロスポリンはその取り込みを阻害することによって、ロスバスタチンの血漿中濃度を増加させると考えられている。[2.4、10.1 参照]

16.7.3 ゲムフィブロジル

ゲムフィブロジル（本邦未承認）と併用投与したとき、ロスバスタチンの C_{max} 及び AUC_{0-t} はそれぞれ 2.21 倍及び 1.88 倍に増加した（外国人データ²²⁾）。ロスバスタチンは OATP1B1 を介して肝臓に取り込まれ、ゲムフィブロジルはその取り込みを阻害することによって、ロスバスタチンの血漿中濃度を増加させると考えられている。

16.7.4 その他の薬剤

ロスバスタチンの体内動態に及ぼす P450 阻害剤の影響を検討するために、フルコナゾール²³⁾（CYP2C9 及び CYP2C19 の阻害剤）、ケトコナゾール²⁴⁾、イトラコナゾール²⁵⁾ 及びエリスロマイシン²⁶⁾（以上 CYP3A4 及び P 糖蛋白の阻害剤）との併用試験を実施したが、明らかな相互作用は認められなかった（外国人データ）。

ワルファリン²⁷⁾（CYP2C9 及び CYP3A4 の基質）あるいはジゴキシン²⁸⁾ の体内動態に及ぼす影響を検討したが、薬物動態学的相互作用は認められなかった（外国人データ）。

CYP3A4 誘導作用の有無を検討するために、経口避妊薬との併用試験を実施したが、エチニルエストラジオールの血漿中濃度に減少はみられず、ロスバスタチンは CYP3A4 に対する誘導作用を示さないと考えられた（外国人データ²⁹⁾）。

16.7.5 *in vitro*試験

ヒト遊離肝細胞を用いる *in vitro* 試験において *N*-脱メチル体が生成したが、その代謝速度は非常に緩徐であった。また、*N*-脱メチル化に関与する主な P450 分子種は CYP2C9 及び CYP2C19 であったが、CYP2D6 や CYP3A4 が関与する可能性も示唆された^{30), 31)}。

ロスバスタチン（50 μ g/mL）による P450（CYP1A2、CYP2C9、CYP2C19、CYP2D6、CYP2E1 及び CYP3A4）活性の阻害率は 10%以下であった³⁰⁾。

2. 薬物速度論的パラメータ

- (1) 解析方法
該当資料なし
- (2) 吸収速度定数
該当資料なし
- (3) 消失速度定数
該当資料なし
- (4) クリアランス
該当資料なし
- (5) 分布容積
該当資料なし
- (6) その他
該当資料なし

3. 母集団（ポピュレーション）解析

- (1) 解析方法
該当資料なし
- (2) パラメータ変動要因
該当資料なし

4. 吸収

16.2.1 生物学的利用率

健康成人男性 10 例におけるロスバスタチンの生物学的利用率は 29.0% (90%信頼区間：24.1～34.9) であった¹²⁾。また、静脈内投与して得られたロスバスタチンの全身クリアランス及び腎クリアランスはそれぞれ 31.9 及び 11.6L/h であり、ロスバスタチンは主に肝臓による消失を受けると考えられた。

5. 分布

(1) 血液－脳関門通過性

該当資料なし

(2) 血液－胎盤関門通過性

「Ⅷ. 安全性 (使用上の注意等) に関する項目 6. 特定の背景を有する患者に関する注意、(5) 妊婦」の項参照

(3) 乳汁への移行性

「Ⅷ. 安全性 (使用上の注意等) に関する項目 6. 特定の背景を有する患者に関する注意、(6) 授乳婦」の項参照

(4) 髄液への移行性

該当資料なし

(5) その他の組織への移行性

本剤は主に肝臓に分布して作用する。

(6) 血漿蛋白結合率

16.3 分布

ヒト血漿中におけるロスバスタチンの蛋白結合率は 89.0% (日本人) ～88.0% (外国人) であり、主結合蛋白はアルブミンであった¹⁴⁾。

6. 代謝

(1) 代謝部位及び代謝経路

16.4 代謝

外国人健康成人男性 6 例に ¹⁴C-ロスバスタチンカルシウム 20mg を単回経口投与したところ、尿及び糞中に存在する放射能の主成分は未変化体であり、尿糞中の主な代謝物は、*N*-脱メチル体及び 5*S*-ラクトン体であった¹⁵⁾。

ヒト血漿中には *N*-脱メチル体及び 5*S*-ラクトン体が検出されたが、HMG-CoA 還元酵素阻害活性体濃度はロスバスタチン濃度と同様の推移を示し、血漿中における HMG-CoA 還元酵素阻害活性に対する代謝物の寄与はわずかであると考えられた (外国人データ)¹⁶⁾。

(2) 代謝に関与する酵素 (CYP 等) の分子種、寄与率

該当資料なし

(3) 初回通過効果の有無及びその割合

該当資料なし

- (4) 代謝物の活性の有無及び活性比、存在比率
該当資料なし

7. 排泄

16.5 排泄

外国人健康成人男性 6 例に ^{14}C -ロスバスタチンカルシウム 20mg を単回経口投与したところ、放射能は主に糞中に排泄され (90.2%)、尿中放射能排泄率は 10.4%であった。また、尿及び糞中への未変化体排泄率は、それぞれ投与量の 4.9%及び 76.8%であった¹⁵⁾。

8. トランスポーターに関する情報

本剤は、OATP1B1 及び BCRP の基質である。

9. 透析等による除去率

該当資料なし

10. 特定の背景を有する患者

16.6 特定の背景を有する患者

16.6.1 性差及び加齢の影響

外国人の男性若年者、男性高齢者、女性若年者及び女性高齢者各 8 例にロスバスタチンカルシウム 40mg (承認外用量) を単回経口投与したところ、男性の C_{\max} 及び AUC_{0-t} はそれぞれ女性の 82% 及び 91%であった¹⁷⁾。また、若年者の C_{\max} 及び AUC_{0-t} はそれぞれ高齢者の 112%及び 106%であり、臨床上問題となる性差や加齢の影響はないと考えられた。

16.6.2 肝障害の影響

Child-Pugh A (スコア : 5~6) あるいは Child-Pugh B (スコア : 7~9) の肝障害を有する外国人患者各 6 例にロスバスタチンカルシウム 10mg を 1 日 1 回 14 日間反復経口投与し、血漿中ロスバスタチン濃度を測定した¹⁸⁾。肝障害患者の C_{\max} 及び $\text{AUC}_{0-24\text{h}}$ は健康成人群のそれぞれ 1.5~2.1 倍及び 1.05~1.2 倍であり、特に、Child-Pugh スコアが 8~9 の患者 2 例における血漿中濃度は、他に比べて高かった。[2.2、9.3 参照]

16.6.3 腎障害の影響

重症度の異なる腎障害を有する外国人患者 (4~8 例) にロスバスタチンカルシウム 20mg を 1 日 1 回 14 日間反復経口投与し、血漿中ロスバスタチン濃度を測定した¹⁹⁾。軽度から中等度の腎障害のある患者では、ロスバスタチンの血漿中濃度に対する影響はほとんど認められなかった。しかし、重度 (クレアチニンクリアランス $<30\text{mL/min/1.73m}^2$) の腎障害のある患者では、健康成人に比べて血漿中濃度が約 3 倍に上昇した。[7.1、9.2 参照]

11. その他

該当資料なし

VIII. 安全性（使用上の注意等）に関する項目

1. 警告内容とその理由

設定されていない

2. 禁忌内容とその理由

2. 禁忌（次の患者には投与しないこと）

2.1 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

2.2 肝機能が低下していると考えられる以下のような患者

急性肝炎、慢性肝炎の急性増悪、肝硬変、肝癌、黄疸 [9.3.1、9.3.2、16.6.2 参照]

2.3 妊婦又は妊娠している可能性のある女性及び授乳婦 [9.5、9.6 参照]

2.4 シクロスポリンを投与中の患者 [10.1、16.7.2 参照]

3. 効能又は効果に関連する注意とその理由

「V. 治療に関する項目 2. 効能又は効果に関連する注意」の項参照

4. 用法及び用量に関連する注意とその理由

「V. 治療に関する項目 4. 用法及び用量に関連する注意」の項参照

5. 重要な基本的注意とその理由

8. 重要な基本的注意

8.1 あらかじめ高コレステロール血症治療の基本である食事療法を行い、更に運動療法や高血圧、喫煙等の虚血性心疾患のリスクファクターの軽減等も十分考慮すること。

8.2 投与中は血中脂質値を定期的に検査し、治療に対する反応が認められない場合には投与を中止すること。

8.3 投与開始又は増量後 12 週までの間は原則、月に 1 回、それ以降は定期的（半年に 1 回等）に肝機能検査を行うこと。[11.1.5 参照]

8.4 血小板減少があらわれることがあるので、血液検査等の観察を十分に行うこと。[11.1.6 参照]

6. 特定の背景を有する患者に関する注意

(1) 合併症・既往歴等のある患者

9.1 合併症・既往歴等のある患者

9.1.1 横紋筋融解症があらわれやすいとの報告がある以下の患者

- ・ アルコール中毒患者
- ・ 甲状腺機能低下症の患者
- ・ 遺伝性の筋疾患（筋ジストロフィー等）又はその家族歴のある患者
- ・ 薬剤性の筋障害の既往歴のある患者

9.1.2 重症筋無力症又はその既往歴のある患者

重症筋無力症（眼筋型、全身型）が悪化又は再発することがある。[11.1.4 参照]

(2) 腎機能障害患者

9.2 腎機能障害患者

9.2.1 腎機能検査値異常のある患者

本剤とフィブラート系薬剤を併用する場合には、治療上やむを得ないと判断される場合にのみ併用すること。急激な腎機能悪化を伴う横紋筋融解症があらわれやすい。やむを得ず併用する場合には、定期的に腎機能検査等を実施し、自覚症状（筋肉痛、脱力感）の発現、CK 上昇、血中及び尿中ミオグロビン上昇並びに血清クレアチニン上昇等の腎機能の悪化を認めた場合は直ちに投与を中止すること。

[10.2 参照]

9.2.2 腎障害又はその既往歴のある患者

横紋筋融解症の報告例の多くが腎機能障害を有する患者であり、また、横紋筋融解症に伴って急激な腎機能悪化があらわれることがある。[7.1、7.2、16.6.3 参照]

9.2.3 重度の腎障害のある患者

本剤の血中濃度が高くなるおそれがある。[7.1、7.2、16.6.3 参照]

(3) 肝機能障害患者

9.3 肝機能障害患者

9.3.1 肝機能が低下していると考えられる以下のような患者

急性肝炎、慢性肝炎の急性増悪、肝硬変、肝癌、黄疸

投与しないこと。これらの患者では、本剤の血中濃度が上昇するおそれがある。また、本剤は主に肝臓に分布して作用するので、肝障害を悪化させるおそれがある。[2.2、16.6.2 参照]

9.3.2 肝障害又はその既往歴のある患者

本剤は主に肝臓に分布して作用するので、肝障害又はその既往歴のある患者では、肝障害を悪化させるおそれがある。特に、Child-Pugh スコアが8～9の患者では、血漿中濃度が他に比べて高かったとの報告がある。[2.2、16.6.2 参照]

(4) 生殖能を有する者

設定されていない

(5) 妊婦

9.5 妊婦

妊婦又は妊娠している可能性のある女性には投与しないこと。ラットに他の HMG-CoA 還元酵素阻害剤を大量投与した場合に胎児の骨格奇形が報告されている。更にヒトでは、他の HMG-CoA 還元酵素阻害剤で、妊娠3 ヶ月までの間に服用したとき、胎児に先天性奇形があらわれたとの報告がある。[2.3 参照]

(6) 授乳婦

9.6 授乳婦

投与しないこと。ラットで乳汁中への移行が報告されている。[2.3 参照]

(7) 小児等

9.7 小児等

小児等を対象とした有効性及び安全性を指標とした臨床試験は実施していない。

(8) 高齢者

設定されていない

7. 相互作用

10. 相互作用

本剤は、OATP1B1 及びBCRP の基質である。

(1) 併用禁忌とその理由

10.1 併用禁忌（併用しないこと）

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
シクロスポリン（サンディミュン、ネオオーラル等） [2.4、16.7.2 参照]	シクロスポリンを投与されている心臓移植患者に併用したとき、シクロスポリンの血中濃度に影響はなかったが、本剤のAUC _{0-24h} が健康成人に単独で反復投与したときに比べて約7倍上昇したとの報告がある。	シクロスポリンが OATP1B1 及びBCRP 等の機能を阻害する可能性がある。

(2) 併用注意とその理由

10.2 併用注意（併用に注意すること）

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
フィブラート系薬剤 ベザフィブラート等 [9.2.1 参照]	フェノフィブラートとの併用においては、いずれの薬剤の血中濃度にも影響はみられていない。しかし一般に、HMG-CoA還元酵素阻害剤との併用で、筋肉痛、脱力感、CK上昇、血中及び尿中ミオグロビン上昇を特徴とし、急激な腎機能悪化を伴う横紋筋融解症があらわれやすい。	両剤共に横紋筋融解症の報告がある。 危険因子：腎機能に関する臨床検査値に異常が認められる患者
ニコチン酸 アゾール系抗真菌薬 イトラコナゾール等 マクロライド系抗生物質 エリスロマイシン等	一般に、HMG-CoA還元酵素阻害剤との併用で、筋肉痛、脱力感、CK上昇、血中及び尿中ミオグロビン上昇を特徴とし、急激な腎機能悪化を伴う横紋筋融解症があらわれやすい。	危険因子：腎機能障害のある患者
クマリン系抗凝固剤 ワルファリン	抗凝血作用が増強することがある。本剤を併用する場合は、本剤の投与開始時及び用量変更時にも頻回にプロトロンビン時間国際標準比（INR）値等を確認し、必要に応じてワルファリンの用量を調節する等、注意深く投与すること。	機序は不明
制酸剤 水酸化マグネシウム・水酸化アルミニウム [16.7.1 参照]	本剤の血中濃度が約50%に低下することが報告されている。本剤投与後2時間経過後に制酸剤を投与した場合には、本剤の血中濃度は非併用時の約80%であった。	

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
ロピナビル・リトナビル アタザナビル/リトナビル ダルナビル/リトナビル グレカプレビル・ピブレン タスビル	本剤とロピナビル・リトナビルを併用したとき本剤のAUCが約2倍、Cmaxが約5倍、アタザナビル及びリトナビル両剤と本剤を併用したとき本剤のAUCが約3倍、Cmaxが7倍、ダルナビル及びリトナビル両剤と本剤を併用したとき本剤のAUCが約1.5倍、Cmaxが約2.4倍上昇したとの報告がある。また本剤とグレカプレビル・ピブレンタスビル ^注 を併用したとき、本剤のAUCが約2.2倍、Cmaxが約5.6倍上昇したとの報告がある。	左記薬剤がOATP1B1及びBCRPの機能を阻害する可能性がある。
ダクラタスビル アスナプレビル ダクラタスビル・アスナプレビル・ベクラブビル	本剤とダクラタスビル、アスナプレビル、またはダクラタスビル・アスナプレビル・ベクラブビル ^注 を併用したとき、本剤の血中濃度が上昇したとの報告がある。	ダクラタスビル、ベクラブビルがOATP1B1、1B3及びBCRPの機能を阻害する可能性がある。また、アスナプレビルがOATP1B1、1B3の機能を阻害する可能性がある。
グラゾプレビル／エルバスビル	本剤とグラゾプレビル ^注 及びエルバスビルを併用したとき、本剤のAUCが約2.3倍、Cmaxが約5.5倍上昇したとの報告がある。	左記薬剤がBCRPの機能を阻害する可能性がある。
ソホスブビル・ベルパタスビル	本剤とベルパタスビルを併用したとき、本剤のAUCが約2.7倍、Cmaxが約2.6倍上昇したとの報告がある。	ベルパタスビルがOATP1B1、1B3及びBCRPの機能を阻害する可能性がある。
ダロルタミド	本剤とダロルタミドを併用したとき、本剤のAUCが5.2倍 ¹⁾ 、Cmaxが5.0倍上昇したとの報告がある。	ダロルタミドがOATP1B1、1B3及びBCRPの機能を阻害する可能性がある。
レゴラフェニブ	本剤とレゴラフェニブを併用したとき、本剤のAUCが3.8倍、Cmaxが4.6倍上昇したとの報告がある。	レゴラフェニブがBCRPの機能を阻害する可能性がある。
カプマチニブ塩酸塩水和物	本剤とカプマチニブ塩酸塩水和物を併用したとき、本剤のAUCが約2.1倍、Cmaxが約3.0倍上昇したとの報告がある。	カプマチニブ塩酸塩がBCRPの機能を阻害することにより、本剤の血中濃度が増加する可能性がある。
バダデュスタット	本剤とバダデュスタットを併用したとき、本剤のAUCが約2.5倍、Cmaxが約2.7倍上昇したとの報告がある。	バダデュスタットがBCRPの機能を阻害することにより、本剤の血中濃度が増加する可能性がある。

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
フェブキシスタット	本剤とフェブキシスタットを併用したとき、本剤のAUCが約1.9倍、C _{max} が約2.1倍上昇したとの報告がある。	フェブキシスタットがBCRPの機能を阻害することにより、本剤の血中濃度が増加する可能性がある。
エルロンボパグ	本剤とエルロンボパグを併用したとき、本剤のAUCが約1.6倍上昇したとの報告がある。	エルロンボパグがOATP1B1及びBCRPの機能を阻害する可能性がある。
ホスタマチニブナトリウム水和物	本剤とホスタマチニブナトリウム水和物を併用したとき、本剤のAUCが1.96倍、C _{max} が1.88倍上昇したとの報告がある。	ホスタマチニブナトリウム水和物がBCRPの機能を阻害する可能性がある。
ロキサデュスタット	本剤とロキサデュスタットを併用したとき、本剤のAUCが2.93倍、C _{max} が4.47倍上昇したとの報告がある。	ロキサデュスタットがOATP1B1及びBCRPの機能を阻害する可能性がある。
タファミジス	本剤とタファミジスを併用したとき、本剤のAUCが1.97倍、C _{max} が1.86倍上昇したとの報告がある。	タファミジスがBCRPの機能を阻害する可能性がある。

注) 承認用量外の用量における試験結果に基づく。

8. 副作用

11. 副作用

次の副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

(1) 重大な副作用と初期症状

11.1 重大な副作用

11.1.1 横紋筋融解症 (0.1%未満)：筋肉痛、脱力感、CK 上昇、血中及び尿中ミオグロビン上昇を特徴とする横紋筋融解症があらわれ、急性腎障害等の重篤な腎障害があらわれることがあるので、このような場合には直ちに投与を中止すること。

11.1.2 ミオパチー (頻度不明)：広範な筋肉痛、高度な脱力感や著明な CK の上昇があらわれた場合には投与を中止すること。

11.1.3 免疫介在性壊死性ミオパチー (頻度不明)：近位筋脱力、CK 高値、炎症を伴わない筋線維の壊死、抗 HMG-CoA 還元酵素 (HMGCR) 抗体陽性等を特徴とする免疫介在性壊死性ミオパチーがあらわれ、投与中止後も持続する例が報告されているので、患者の状態を十分に観察すること。なお、免疫抑制剤投与により改善がみられたとの報告例がある。

11.1.4 重症筋無力症 (頻度不明)：重症筋無力症 (眼筋型、全身型) が発症又は悪化することがある。
[9.1.2 参照]

11.1.5 肝炎 (0.1%未満)、**肝機能障害** (1%未満)、**黄疸** (頻度不明)：肝炎、AST、ALT の上昇等を伴う肝機能障害、黄疸があらわれることがある。[8.3 参照]

11.1.6 血小板減少 (0.1%未満) [8.4 参照]

11.1.7 過敏症状 (0.1%未満)：血管浮腫を含む過敏症状があらわれることがある。

11.1.8 間質性肺炎 (0.1%未満)：長期投与であっても、発熱、咳嗽、呼吸困難、胸部 X 線異常等が認められた場合には投与を中止し、副腎皮質ホルモン剤の投与等の適切な処置を行うこと。

11.1.9 末梢神経障害 (0.1%未満)：四肢の感覚鈍麻、しびれ感等の感覚障害、疼痛、あるいは筋力低下等の末梢神経障害があらわれることがある。

11.1.10 多形紅斑 (頻度不明)

(2) その他の副作用

11.2 その他の副作用

	2～5%未満	0.1～2%未満	0.1%未満	頻度不明
皮膚		そう痒症、発疹、蕁麻疹		苔癬様皮疹
消化器		腹痛、便秘、嘔気、下痢	膵炎、口内炎	
筋・骨格系	CK上昇	無力症、筋肉痛、関節痛	筋痙攣	
精神神経系		頭痛、浮動性めまい	健忘、睡眠障害 (不眠、悪夢等)、抑うつ	
内分泌				女性化乳房
代謝異常			HbA1c 上昇、血糖値上昇	
肝臓	肝機能異常 (AST 上昇、ALT 上昇)			
腎臓		尿蛋白 ^{注)} 、腎機能異常 (BUN 上昇、血清クレアチニン上昇)		

注) 通常一過性であるが、原因不明の蛋白尿が持続する場合には減量するなど適切な処置を行うこと。発現頻度は使用成績調査から算出した。

9. 臨床検査結果に及ぼす影響

設定されていない

10. 過量投与

設定されていない

11. 適用上の注意

14. 適用上の注意

14.1 薬剤調製時の注意

〈OD錠〉

本剤は一包化調剤を避けること。[20.2 参照]

14.2 薬剤交付時の注意

〈製剤共通〉

14.2.1 PTP包装の薬剤はPTPシートから取り出して服用するよう指導すること。PTPシートの誤飲により、硬い鋭角部が食道粘膜へ刺入し、更には穿孔をおこして縦隔洞炎等の重篤な合併症を併発することがある。

〈OD錠〉

14.2.2 本剤は舌の上にのせて唾液を浸潤させると崩壊するため、水なしで服用可能である。また、水で服用することもできる。

12. その他の注意

(1) 臨床使用に基づく情報

15.1 臨床使用に基づく情報

海外において、ロスバスタチンを含むHMG-CoA還元酵素阻害剤投与中の患者では、糖尿病発症のリスクが高かったとの報告がある。

(2) 非臨床試験に基づく情報

設定されていない

IX. 非臨床試験に関する項目

1. 薬理試験

- (1) 薬効薬理試験
「VI. 薬効薬理に関する項目」の項参照
- (2) 安全性薬理試験
該当資料なし
- (3) その他の薬理試験
該当資料なし

2. 毒性試験

- (1) 単回投与毒性試験
該当資料なし
- (2) 反復投与毒性試験
該当資料なし
- (3) 遺伝毒性試験
該当資料なし
- (4) がん原性試験
該当資料なし
- (5) 生殖発生毒性試験
「VIII. 安全性（使用上の注意等）に関する項目 6. 特定の背景を有する患者に関する注意、(5) 妊婦」の項参照
- (6) 局所刺激性試験
該当資料なし
- (7) その他の特殊毒性
該当資料なし

X. 管理的事項に関する項目

1. 規制区分

製 剤：処方箋医薬品（注意—医師等の処方箋により使用すること）

有効成分：該当しない

2. 有効期間

有効期間：3 年

3. 包装状態での貯法

室温保存

4. 取扱い上の注意

20. 取扱い上の注意

〈錠〉

20.1 アルミピロー包装開封後は湿気を避けて保存すること。

〈OD 錠〉

20.2 アルミピロー包装開封後は湿気を避けて保存すること。また、光によって分解するため、服用直前まで PTP シートから取り出さないこと。

5. 患者向け資料

患者向医薬品ガイド：有、くすりのしおり：有

その他の患者向け資料：有（「XⅢ.備考 2.その他の関連資料」を参照）

6. 同一成分・同効薬

同一成分薬： Crestor 錠、Crestor OD 錠

同 効 薬：プラバスタチンナトリウム、シンバスタチン、フルバスタチンナトリウム、アトルバスタチンカルシウム、ピタバスタチンカルシウム水和物

7. 国際誕生年月日

2002 年 11 月 6 日

8. 製造販売承認年月日及び承認番号、薬価基準収載年月日、販売開始年月日

(1) ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」

履歴	製造販売承認年月日	承認番号	薬価基準収載年月日	販売開始年月日
製造販売承認	2017年8月15日	22900AMX00807000	2017年12月8日	2017年12月8日
製造販売承認 (販売名変更)	2019年1月22日	23100AMX00123000	2023年6月16日	〃

旧販売名：ロスバスタチン錠 2.5mg 「共創未来」 経過措置期間満了：2024年3月31日

(2) ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」

履歴	製造販売承認年月日	承認番号	薬価基準収載年月日	販売開始年月日
製造販売承認	2017年8月15日	22900AMX00808000	2017年12月8日	2017年12月8日
製造販売承認 (販売名変更)	2019年1月22日	23100AMX00124000	2023年6月16日	〃

旧販売名：ロスバスタチン錠 5mg 「共創未来」 経過措置期間満了：2024年3月31日

(3) ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KMP」

履歴	製造販売承認年月日	承認番号	薬価基準収載年月日	販売開始年月日
製造販売承認	2017年8月15日	22900AMX00814000	2017年12月8日	2017年12月8日
製造販売承認 (販売名変更)	2019年1月22日	23100AMX00114000	2023年6月16日	〃

旧販売名：ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「共創未来」 経過措置期間満了：2024年3月31日

(4) ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」

履歴	製造販売承認年月日	承認番号	薬価基準収載年月日	販売開始年月日
製造販売承認	2017年8月15日	22900AMX00815000	2017年12月8日	2017年12月8日
製造販売承認 (販売名変更)	2019年1月22日	23100AMX00115000	2023年6月16日	〃

旧販売名：ロスバスタチン OD 錠 5mg 「共創未来」 経過措置期間満了：2024年3月31日

9. 効能又は効果追加、用法及び用量変更追加等の年月日及びその内容

2023年7月19日：家族性高コレステロール血症

10. 再審査結果、再評価結果公表年月日及びその内容

該当しない

11. 再審査期間

該当しない

12. 投薬期間制限に関する情報

本剤は、投薬（あるいは投与）期間に関する制限は定められていない。

13. 各種コード

販売名	厚生労働省薬価基準 収載医薬品コード	個別医薬品コード (YJ コード)	HOT (9桁) 番号	レセプト電算処理 システム用コード
ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」	2189017F1308	〃	125825701	622582502
ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」	2189017F2304	〃	125827101	622582702
ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KNP」	2189017F3211	〃	125826401	622582602
ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」	2189017F4218	〃	125828801	622582802

14. 保険給付上の注意

本剤は保険診療上の後発医薬品である。

X I. 文献

1. 引用文献

- (1) 共創未来ファーマ(株)社内資料：ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」の安定性試験に関する資料
- (2) 共創未来ファーマ(株)社内資料：ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」の安定性試験に関する資料
- (3) 共創未来ファーマ(株)社内資料：ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KMP」の安定性試験に関する資料
- (4) 共創未来ファーマ(株)社内資料：ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」の安定性試験に関する資料
- (5) 共創未来ファーマ(株)社内資料：ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」の溶出試験に関する資料
- (6) 共創未来ファーマ(株)社内資料：ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」の溶出試験に関する資料
- (7) 共創未来ファーマ(株)社内資料：ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KMP」の溶出試験に関する資料
- (8) 共創未来ファーマ(株)社内資料：ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」の溶出試験に関する資料
- (9) グッドマン・ギルマン薬理書ー薬物治療の基礎と臨床ー・第12版（高折修二・橋本敬太郎・赤池昭紀・石井邦雄監訳）P439 廣川書店（2013）
- (10) 共創未来ファーマ(株)社内資料：ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」の生物学的同等性試験に関する資料
- (11) 共創未来ファーマ(株)社内資料：ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」の生物学的同等性試験に関する資料
- (12) 共創未来ファーマ(株)社内資料：ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」の粉砕時安定性試験に関する資料
- (13) 共創未来ファーマ(株)社内資料：ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」の粉砕時安定性試験に関する資料
- (14) 共創未来ファーマ(株)社内資料：ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KMP」の粉砕時安定性試験に関する資料
- (15) 共創未来ファーマ(株)社内資料：ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」の粉砕時安定性試験に関する資料
- (16) 共創未来ファーマ(株)社内資料：ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」の簡易懸濁試験に関する資料
- (17) 共創未来ファーマ(株)社内資料：ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」の簡易懸濁試験に関する資料
- (18) 共創未来ファーマ(株)社内資料：ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KMP」の簡易懸濁試験に関する資料
- (19) 共創未来ファーマ(株)社内資料：ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」の簡易懸濁試験に関する資料
- (20) 共創未来ファーマ(株)社内資料：ロスバスタチン錠 「KMP」の全自動分包機落下試験に関する資料
- (21) 共創未来ファーマ(株)社内資料：ロスバスタチン OD 錠 「KMP」の全自動分包機落下試験に関する資料

2. その他の参考文献

電子添文主要文献

- 1) Zurth C, et al.: Eur J Drug Metab Pharmacokinet. 2019;44(6):747-59
- 2) 単回投与後の血漿中濃度, 1996（クレストール錠：2005年1月19日承認、申請資料概要へ3.3.1.2）
- 3) Martin PD, et al. Clin Ther 2003;25(8):2215-24
- 4) 反復投与後の血漿中濃度, 2001（クレストール錠：2005年1月19日承認、申請資料概要へ3.4）
- 5) 反復投与後の血中濃度（クレストール錠：2005年1月19日承認、申請資料概要イ3.2.2.2）
- 6) 患者における血漿中濃度, 2002（クレストール錠：2005年1月19日承認、申請資料概要へ3.6）
- 7) 患者における血漿中濃度（クレストール錠：2005年1月19日承認、申請資料概要へ3.7.8）
- 8) Martin PD, et al. Br J Clin Pharmacol. 2002;54(5):472-7
- 9) 共創未来ファーマ株式会社 社内資料：ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」の生物学的同等性試験に関する資料（2016）
- 10) 共創未来ファーマ株式会社 社内資料：ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」の生物学的同等性試験（水なし）に関する資料（2017）
- 11) 共創未来ファーマ株式会社 社内資料：ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」の生物学的同等性試験（水あり）に関する資料（2016）
- 12) 生物学的利用率, 2001（クレストール錠：2005年1月19日承認、申請資料概要へ3.5）
- 13) 食事の影響, 2000（クレストール錠：2005年1月19日承認、申請資料概要へ3.7.5）
- 14) 蛋白結合率, 2000（クレストール錠：2005年1月19日承認、申請資料概要へ2.2.5）
- 15) 尿糞中排泄率, 1999（クレストール錠：2005年1月19日承認、申請資料概要へ3.7.9.5）

- 16) HMG-CoA 還元酵素阻害活性体の血漿中濃度, 2000 (クレストール錠 : 2005 年 1 月 19 日承認、申請資料概要へ 3. 7. 9. 4)
- 17) Martin PD, et al. J Clin Pharmacol. 2002;42(10):1116-21
- 18) Simonson SG, et al. Eur J Clin Pharmacol. 2003;58(10):669-75
- 19) 腎障害の影響, 2001 (クレストール錠 : 2005 年 1 月 19 日承認、申請資料概要へ 3. 7. 11)
- 20) 薬物相互作用—制酸剤, 2000 (クレストール錠 : 2005 年 1 月 19 日承認、申請資料概要へ 3. 7. 12. 2(f))
- 21) Simonson SG, et al. Clin Pharmacol Ther. 2004;76(2):167-77
- 22) Schneck DW, et al. Clin Pharmacol Ther. 2004;75(5):455-63
- 23) Cooper KJ, et al. Eur J Clin Pharmacol. 2002;58(8):527-31
- 24) Cooper KJ, et al. Br J Clin Pharmacol. 2003;55(1):94-9
- 25) Cooper KJ, et al. Clin Pharmacol Ther. 2003;73(4):322-9
- 26) Cooper KJ, et al. Eur J Clin Pharmacol. 2003;59(1):51-6
- 27) Simonson SG, et al. J Clin Pharmacol. 2005;45(8):927-34
- 28) Martin PD, et al. J Clin Pharmacol. 2002;42(12):1352-7
- 29) Simonson SG, et al. Br J Clin Pharmacol. 2004;57(3):279-86
- 30) McCormick AD, et al. J Clin Pharmacol. 2000;40:1055
- 31) ロスバスタチンの *in vitro* 代謝 (クレストール錠 : 2005 年 1 月 19 日承認、申請資料概要へ 3. 7. 9)
- 32) 共創未来ファーマ株式会社 社内資料 : ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」 の溶出試験に関する資料 (2016)
- 33) 共創未来ファーマ株式会社 社内資料 : ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KMP」 の溶出試験に関する資料 (2016)
- 34) Schneck DW, et al. Am J Cardiol. 2003;91(1):33-41
- 35) アトルバスタチンとの用量反応比較試験 (クレストール錠 : 2005 年 1 月 19 日承認、申請資料概要ト 1. 3. 2)
- 36) 日本人高コレステロール血症患者における有効性, 2002 (クレストール錠 : 2005 年 1 月 19 日承認、申請資料概要ト 1. 2. 3)
- 37) 外国人高コレステロール血症患者における有効性, 2001 (クレストール錠 : 2005 年 1 月 19 日承認、申請資料概要ト 2. 1. 2. 1)
- 38) 外国人高コレステロール血症患者の長期投与における有効性, 2001 (クレストール錠 : 2005 年 1 月 19 日承認、申請資料概要ト 1. 5. 2)
- 39) Olsson AG, et al. Am Heart J. 2002;144(6):1044-51
- 40) Mabuchi H, et al. J Atheroscler Thromb. 2004;11(3):152-8
- 41) ヘテロ接合体性 FH 患者における増量、長期投与試験 (クレストール錠 : 2005 年 1 月 19 日承認、申請資料概要ト 1. 4. 2)
- 42) Nezasa K, et al. Xenobiotica. 2003;33(4):379-88
- 43) 作用機序のまとめ (クレストール錠 : 2005 年 1 月 19 日承認、申請資料概要ホ 1. 2. 8)
- 44) McTaggart F, et al. Am J Cardiol. 2001;87(5A):28B-32B
- 45) LDL 受容体に対する作用, 2002 (クレストール錠 : 2005 年 1 月 19 日承認、申請資料概要ホ 1. 2. 3)
- 46) イヌの血中脂質に対する作用, 2002 (クレストール錠 : 2005 年 1 月 19 日承認、申請資料概要ホ 1. 1. 1)
- 47) カニクイザルの血清コレステロール及びリポ蛋白コレステロールに対する作用, 2002 (クレストール錠 : 2005 年 1 月 19 日承認、申請資料概要ホ 1. 1. 2)
- 48) WHHL ウサギの血清コレステロール及び動脈硬化病変に対する作用, 2002 (クレストール錠 : 2005 年 1 月 19 日承認、申請資料概要ホ 1. 1. 3)
- 49) アポ蛋白 E*3Leiden トランスジェニックマウスに対する作用, 2002 (クレストール錠 : 2005 年 1 月 19 日承認、申請資料概要ホ 1. 1. 4)
- 50) ヒトアポ蛋白 B/CETP トランスジェニックマウスに対する作用, 2002 (クレストール錠 : 2005 年 1 月 19 日承認、申請資料概要ホ 1. 1. 5)

X II. 参考資料

1. 主な外国での発売状況

該当しない

2. 海外における臨床支援情報

該当資料なし

XIII. 備考

1. 調剤・服薬支援に際して臨床判断を行うにあたっての参考情報

本項の情報に関する注意：本項には承認を受けていない品質に関する情報が含まれる。試験方法等が確立していない内容も含まれており、あくまでも記載されている試験方法で得られた結果を事実として提示している。医療従事者が臨床適用を検討する上での参考情報であり、加工等の可否を示すものではない。

掲載根拠：「医療用医薬品の販売情報提供活動に関するガイドラインに関する Q&A について（その3）」
（令和元年9月6日付 厚生労働省医薬・生活衛生局監視指導・麻薬対策課 事務連絡）

(1) 粉砕

1) ロスバスタチン錠 2.5mg 「KMP」⁽¹²⁾

試験の種類	保存条件	保存形態	保存期間	結果
加温	40℃、遮光	気密（褐色ガラス瓶）	3 ヶ月	類縁物質のわずかな増加（規格内）
室温	25℃、60%RH、遮光	開放（褐色ガラス瓶）	3 ヶ月	変化なし
曝光	3,000Lux (25℃、60%RH)	開放（シャーレ）	60 万 Lux・hr	性状変化（参考規格外）、類縁物質増加（規格外）、溶出率低下（規格外）、含量低下（規格外）

項目：性状（参考）、純度試験：類縁物質、溶出性、定量、純度試験：光学異性体（参考）

2) ロスバスタチン錠 5mg 「KMP」⁽¹³⁾

試験の種類	保存条件	保存形態	保存期間	結果
加温	40℃、遮光	気密（褐色ガラス瓶）	3 ヶ月	類縁物質のわずかな増加（規格内）
室温	25℃、60%RH、遮光	開放（褐色ガラス瓶）	3 ヶ月	変化なし
曝光	3,000Lux (25℃、60%RH)	開放（シャーレ）	60 万 Lux・hr	性状変化（参考規格外）、類縁物質増加（規格外）、溶出率低下（規格外）、含量低下（規格外）

項目：性状（参考）、純度試験：類縁物質、溶出性、定量、純度試験：光学異性体（参考）

3) ロスバスタチン OD 錠 2.5mg 「KMP」⁽¹⁴⁾

保存条件	保存形態	保存期間	結果
25℃、60%RH、遮光	開放（褐色ガラス瓶）	3 ヶ月	類縁物質のわずかな増加（規格内）

項目：性状（参考）、純度試験：類縁物質、溶出性、定量、純度試験：光学異性体（参考）

4) ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」⁽¹⁵⁾

保存条件	保存形態	保存期間	結果
25℃、60%RH、遮光	開放（褐色ガラス瓶）	3 ヶ月	類縁物質のわずかな増加（規格内）

項目：性状（参考）、純度試験：類縁物質、溶出性、定量、純度試験：光学異性体（参考）

(2) 崩壊・懸濁性及び経管投与チューブの通過性

1) 試験方法

①崩壊懸濁試験... ディスペンサーのピストン部を抜き取り、ディスペンサー内に試料1錠を入れてピストンを戻し、ディスペンサーに約55℃の温湯20mLを吸い取り、筒先の蓋をして5分間自然放置する。5分後にディスペンサーを手で90度15往復横転し、崩壊・懸濁の状態を観察する。5分後に崩壊しない場合、さらに5分間放置後、同様の操作を行う。10分間放置しても崩壊・懸濁しない場合、錠剤をコーティング破壊してから、ディスペンサー内に入れて同様の操作を行い、崩壊・懸濁の状態を観察する。

②通過性試験... 崩壊懸濁試験で得られた懸濁液を、ディスペンサーに吸い取り、経管チューブの注入端より2～3mL/秒の速度で注入する。チューブはベッド上の患者を想定し、体内挿入端から3分の2を水平にし、他端（注入端）を30cmの高さにセットし、チューブ（サイズ；8フレンチ）の通過性を観察する。
なお、8フレンチのチューブを通過しない場合は、18フレンチのチューブを用いて同様に通過性を観察する。

2) 試験結果

- 2-1) ロスバスタチン錠2.5mg「KMP」⁽¹⁶⁾：5分以内に崩壊・懸濁し、チューブ（8フレンチ）を通過した。
- 2-2) ロスバスタチン錠5mg「KMP」⁽¹⁷⁾：5分以内に崩壊・懸濁し、チューブ（8フレンチ）を通過した。
- 2-3) ロスバスタチンOD錠2.5mg「KMP」⁽¹⁸⁾：5分以内に崩壊・懸濁し、チューブ（8フレンチ）を通過した。
- 2-4) ロスバスタチンOD錠5mg「KMP」⁽¹⁹⁾：5分以内に崩壊・懸濁し、チューブ（8フレンチ）を通過した。

2. その他の関連資料

(1) 錠剤等の一包化調剤に用いる自動調剤分包機での落下耐久性等の各種調剤機器適合性

1) ロスバスタチン錠2.5mg「KMP」⁽²⁰⁾

機器名	型式	メーカー名	一包化条件	結果
全自動錠剤分包機 PROUD	YS-TR-260FDS II	株式会社湯山製作所	カセット位置：最上段 1包中の錠剤数：2錠	割れ・欠けは認められなかった。
全自動錠剤分包機 Eser	HP-j128HS-GP	株式会社タカゾノ	分包数：100包 錠剤数：200錠	割れ・欠けは認められなかった。

2) ロスバスタチン錠5mg「KMP」⁽²⁰⁾

機器名	型式	メーカー名	一包化条件	結果
全自動錠剤分包機 PROUD	YS-TR-260FDS II	株式会社湯山製作所	カセット位置：最上段 1包中の錠剤数：2錠	割れ・欠けは認められなかった。
全自動錠剤分包機 Eser	HP-j128HS-GP	株式会社タカゾノ	分包数：100包 錠剤数：200錠	割れ・欠けは認められなかった。

3) ロスバスタチンOD錠2.5mg「KMP」⁽²¹⁾

機器名	型式	メーカー名	一包化条件	結果
全自動錠剤分包機 PROUD	YS-TR-260FDS II	株式会社湯山製作所	カセット位置：最上段 1包中の錠剤数：2錠	割れ・欠けは認められなかった。
全自動錠剤分包機 Eser	HP-j128HS-GP	株式会社タカゾノ	分包数：100包 錠剤数：200錠	割れ・欠けは認められなかった。

4) ロスバスタチン OD 錠 5mg 「KMP」⁽²⁾

機器名	型式	メーカー名	一包装条件	結果
全自動錠剤分包機 PROUD	YS-TR-260FDS II	株式会社湯山製作所	カセット位置：最上段 1 包中の錠剤数：2 錠	害れ・欠けは認められなかった。
全自動錠剤分包機 Eser	HP-j128HS-GP	株式会社タカゾノ	分包数：100 包 錠剤数：200 錠	害れ・欠けは認められなかった。

(2) その他の患者向け資料

- ・ロスバスタチン錠／OD 錠「KMP」を服用される患者様へ

表

ロスバスタチン錠／OD錠「KMP」
を服用される患者さまへ

ロスバスタチン錠／OD錠「KMP」は、
コレステロールの合成を抑えることで、血液中の
コレステロールを減らすお薬です。


このお薬の飲み方

- 1日1回、決められた量を服用します。
- コップ一杯程度の水またはぬるま湯でお飲みください。
- 飲み忘れた場合は、気がついたときにできるだけ早く
1回分を飲んでください。
絶対に2回分を一度に飲んではいけません。

OD錠を服用される患者さまへ

このお薬は水なしでも飲むことができる
口腔内崩壊錠(OD錠)です。

- 舌の上で唾液を含ませ軽くつぶしてから、
唾液と一緒に飲み込んでください。
- 水なしで飲むときは、寝たままでは飲まないでください。
- 普通のお薬と同様に、水またはぬるま湯で飲むこともできます。
どちらの飲み方でも効きめは変わりません。



裏

このお薬を飲むときの注意点

このお薬は、ごくまれに筋肉の副作用である「横紋筋融解症」が
起こることがあります。次のような症状がみられたら、すぐに
服用を中止して医師または薬剤師にご相談ください。

① 筋肉が痛い
② 手足に力が入らない
③ 尿の色が濃い(赤褐色になる)

副作用はどんなお薬にもありますが、早期に発見し適切な処置
をおこなえば、大事に至ることはほとんどありません。

横紋筋融解症とは

筋肉が障害され、筋肉痛や脱力などの症状があらわれ、
筋肉の成分(ミオグロビン等)が血液中に流れ出る病気
です。赤褐色の尿が見られることがあります。放っておくと
腎臓の機能が低下し、尿が出にくくなることもあります。

ほかにも気になることや、わからないことがある場合は
医師または薬剤師に相談してください。

医師または薬剤師の連絡先

共創未来ファーマ株式会社

M000001721
2023年9月作成

- ・共創未来ファーマ株式会社 製品情報ホームページ「医療関係者の方へ」


<http://www.kyosomirai-p.co.jp/medical/top.html>

- ・「X I.文献」に記載の社内資料につきましても下記にご請求ください。

共創未来ファーマ株式会社 お客様相談室

〒155-8655 東京都世田谷区代沢 5-2-1

TEL 050-3383-3846

製造販売元
 **共創未来ファーマ株式会社**
東京都品川区広町 1-4-4